

バルトン忌 2025 記念講演会

報 告 書



2025 年 12 月

主催：特定非営利活動法人日本水循環文化研究協会

表紙の写真について

バルトンの死後 20 年が経った 1919 年 3 月 30 日、日本に帰国する直前の浜野彌四郎氏が建設委員長を務め、台北水道水源地（現在の台北自来水園区）にバルトンの胸像が建てられました。

バルトンの銅像は戦時中の金属供出で失われましたが、稻場紀久雄・大阪経済大名誉教授や台北自来水事業処、駐日台北経済文化代表処の協力のもと、復元事業が企画され、台湾の彫刻家、蒲浩明氏が歴史的検証に基づいて胸像を再建。2021 年、102 年前と同じ 3 月 30 日、台北市政府が主催する「台日英共同による銅像再建除幕式」が行われ、自来水博物館にバルトン胸像が復元されました。バルトンを顕彰する日台協働のモニュメントと言えます。

（写真提供：岡崎秀紀氏）

バルトン忌 2025



バルトンの墓前にて (2025/8/5)

記念講演会



駐日台北経済文化代表処謝長廷前代表



稻場紀久雄大阪経済大学名誉教授
(本会前代表)



たくさんの写真を紹介しながらメアリー・ローズの生涯を語る稻場日出子さん



座談会



講演会後の記念撮影

(写真提供：鈴木玲子さん、杉山美也子さん)

メアリー・ローズ・バートンが明治27(1894)年の東京を描いた水彩画2点



東京・亀戸の藤



東京・向島の桜並木の道

この2枚の水彩画については、講演録「W. K.バルトンの妹、画家メアリー・ローズ」参照

(丸山挽歌記念館撮影)

バルトン忌 2025 特別企画

主催：特定非営利活動法人日本循環文化研究協会

協賛

台湾政府：台北駐日經濟文化代表処、中華民国僑務委員會僑務委員 林月理、陳五福

企業：株式会社 NJS、管清工業株式会社、株式会社カンツール、株式会社日水コン、

前澤工業株式会社（五十音順）

市民団体：NPO 法人日本スコットランド協会

台湾団体：特定非営利活動法人育桜会、台湾国際美食創新交流協会、渋谷国際皮膚科、

東和株式会社（日本華信）

報道関係：水道産業新聞社、日本水道新聞社（五十音順）

協力：東京台湾商工会、松江バルトン会

※ 敬称略

バルトン忌 2025 記念講演会

報 告 書

2025 年12月

主催：特定非営利活動法人日本水循環文化研究協会

バルトン忌 2025 特別講演会 報告書

目 次

主催者挨拶	酒井 彰	1
台北駐日経済文化代表処 謝長廷前代表挨拶		3
バルトン先生と台湾に縁のある方々からの挨拶		
榎原 政博		7
濱野靖一郎		9
八田 修一		11
講演		
W.K.バルトンの妹、画家メアリー・ローズ		
日本水循環文化研究協会 稲場日出子		15
バルトンの松江市衛生事項に関する復命書と台湾		
～主に提出月日に関する仮説～		
大阪経済大学名誉教授 稲場紀久雄		37
2024 展示会「松江市における衛生思想の歴史と今」		
と『図録』刊行について	松江バルトン会 岡崎 秀紀	50
座談会		
バルトン先生が拓いた日台の水インフラに関わる人の「環」		55
謝長廷、八田修一（台湾世界遺産登録応援会）、岡崎秀紀、		
稲場紀久雄、鄧淑晶（日本水循環文化研究協会）、		
進行：酒井彰		
あとがき		66
【参考資料】		71
バルトン忌 2025 特別企画プログラム		
日本水循環文化研究協会バルトン関係資料		
日本水循環文化研究協会・会報「ふくりゅう」記事		
バルトン略年表		
巴爾頓年表		
関連臺灣史年表		

主 催 者 挨 拶

日本水循環文化研究協会 酒井 彰

本日は、酷暑のなかお集まりいただき誠にありがとうございます。とくに午前中の墓参から参加いただいておられる方々におかれましては、無事にご参集しておられるようで安心しております。熱中症対策をお取りいただけましたようで何よりです。

本日のバルトン忌を主催させていただきました日本水循環文化研究協会の酒井です。本会は、人類にとっての共有財である水が社会にもたらす恵沢を増進するため、健全な水循環の達成、水循環文化の普及啓発・継承を図るとともに、水循環管理の向上を促すための政策提言、そして、活動を通して得られた知見を世界に広げる活動を行っているNPO法人です。

水循環協のバルトン顕彰活動

本会は、1990年代より今日まで毎年8月にバルトン忌を開催してまいりました。これは、中心となって本会を設立された稻場紀久雄先生のご発案によるものです。稻場先生はバルトン研究の第一人者であり、本日もご講演されますが、バルトン忌を「年に一度衛生工学の原点を振り返る機会にする」ということをおっしゃっています。

本会がバルトン忌を継続しているということは、NHKテレビでも取り上げられたり、英国人記者の目に留まつたりしたこともあります。

バルトン顕彰活動としては、バルトン忌以外にも、母国スコットランドでの2度にわたる交流事業を行ってまいりました。バルトン先生の顕彰は本会にとって重要な活動となっています。なお、本会は、一昨年、今の名称に改称しましたが、もともと日本下水文化研究会と称しておりましたので、これらは下水文化研究会の事業として行ってきました。

皆様にお配りした配布資料の参考資料の1ページ目にQRコードが示されています。これは、青山霊園のバルトン先生の墓地の前に掲示されています。このQRコードから、これまでのバルトン忌で行われた講演の記録を振り返ることができます。(配布資料参考資料は本報告書にも記載しております。QRコードはp.80参照)

バルトン忌2025特別企画の主旨

皆様ご存じのように、バルトン先生は1896年、台湾に渡り、台湾の公衆衛生

改善の礎を築かれました。こうして、バルトン先生を通じ日本と台湾は深い関係にあるわけですが、本日お迎えしている、謝長廷前大使（駐日台北経済文化代表処代表）は、台北自來水博物館のバルトン胸像復元にご尽力され、本会のバルトン顕彰活動にもご理解を示してこられました。2020年には、バルトン忌に参加され、代表処においてバルトン先生胸像再建祝賀式を行われました。

今朝皆様が墓参された青山靈園のバルトン先生の墓地は一時管理者不在の時があったのですが、今日墓前でメッセージを読まれた榎原衛さんのお父様、榎原明氏が管理者をお引き受け下さいました。昨年、古くなったフェンスを撤去するなど墓地整備の要請を靈園から受けた折、日本を離任する直前の謝大使から個人的に寄付の申し出があり、このご寄付をもとに本会としては「バルトン基金」を創設し、この工事だけでなく、今後のバルトン顕彰活動を行っていく資金としてストックしていくことを決めました。

その謝前代表が、退任後、日本と関わりのあるお仕事に就かれ、日本訪問の機会も少なくないことから、バルトン忌に参加したいとおっしゃっているとお聞きしました。そこで、謝さんをお迎えして、日台交流を目的とした特別の企画を考えられないか、ということを謝さんとも親交の深い鄧淑晶さんから持ちかけられ、4月半ばごろから、企画を考え、本会の賛助会員をはじめご協賛をいただけそうな団体にご協力をお願いしましたところ、日本と台湾の多くの団体、個人の有志の皆様からご理解とご協賛をいただけたこととなりました。こうして、今日の講演会が開催するにあたり、ご協賛をいただいた各位に心より感謝申し上げます。

こうして、多くのご参加を得て、この講演会を開催するに至ったわけでございます。

本日のプログラム

本日のプログラムを簡単にご紹介します。まず、現在は台湾政府資政となられておられる謝長廷様からのご挨拶をいただいたあと、バルトン先生ならびにバルトン先生を引き継いで、台湾の公衆衛生の向上に多大な貢献をされた濱野弥四郎、八田與一両氏のご子孫3名よりご挨拶をいただきます。続いて、バルトン先生を巡る3題の講演、そして、「バルトン先生が拓いた日台の水インフラに関わる人の環」と題する座談会を予定しています。

何かと至らない点もあるうかと思いますが、先人の功績を顕彰することの意味について考え、バルトン忌を継続していく展望が拓かれるきっかけになればと思っておりますので、本日は最後までお付き合いいただきますようお願いします。

台北駐日經濟文化代表処 謝長廷前代表挨拶

日本水循環文化研究協会の皆様、酒井理事長、稻場先生、八田修一先生、そして東京台湾商工会会長をはじめとする皆様、こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました謝長廷でございます。

先ほど「資政」とご紹介いただきましたが、資政とは、特別な顧問、どこが特別かと言いますと、給料がないところです（笑）。本日は、「2025年バルトン忌特別企画」に参加させていただき、心より光栄に存じます。

本企画は、台湾との絆を振り返る貴重な機会であり、私にとっても深い意味を持つ場です。本日は、台湾における駐日大使の経験を通じて、バルトン氏を記念する意義について、私なりの視点からお話しさせていただきます。

その前に、まず私自身と日本との関わりについて、簡単に自己紹介をさせていただきます。

バルトン氏が遺した水循環の思想—自然と人間の共生—は、まさに法哲学の実践形

私は1972年、昭和47年に台湾大学を卒業いたしました。当時、台湾と日本は国交を有しており、そのご縁もあって、日本の文部省の奨学金をいただき、京都大学大学院に留学する機会を得ました。

京都では、法哲学、すなわち法律の根底にある思想や価値を研究し、修士課程を経て博士課程を修了いたしました。その後、台湾に帰国し、弁護士として活動を始めるとともに、当時の台湾における民主化運動や政治運動にも参加いたしました。

このような経験を通じて、私は「法」と「哲学」が社会の根幹を支えるものであることを実感しました。そして、バルトン氏が遺した水循環の思想、自然と人間の共生は、まさに法哲学の実践形とも言えるものです。

その後、私は政界、政治の世界に身を投じ、市会議員、国会議員、高雄市長、そして行政院長を歴任いたしました。高雄市長を務めた時、あるいは行政院長を務めた時には、台湾新幹線の開通や高雄市内の河川浄化を成功させ、台湾で高く評価されました。また、台湾の総統選にも挑戦いたしましたが、結果は残念ながら叶いませんでした。

2016年からは、当時の蔡英文総統の任命を受け、台湾の駐日代表（正式な国交がないため「大使」ではなく「代表」という肩書きで）として8年以上にわたり勤務いたしました。現在は、総統府の顧問、すなわち「資政」という立場

で、引き続き台湾の公共政策や国際関係に関わっております。

私は、政治活動を行う中で、いろいろな理想あるいは主張を掲げてまいりました。例えば「台湾運命共同体」や「共生—共に生きること」、「環境優先」、「幸福経済」などの理念は、いずれも私が日本に留学した経験から大きな影響を受けたものです。

善もまた循環する

2016年、私が台湾の駐日代表に就任した際には、「善の循環」という概念を提唱いたしました。これは、台湾と日本の関係において、互いの善意が連鎖し、社会全体に前向きな影響をもたらすという思想です。水が循環するように、善もまた循環する、そのような信念を込めております。

バルトン氏が遺した水循環の思想は、まさに「善の循環」と響き合うものです。水が命を育み、文化をつなぎ、世代を超えて流れ続けるように、善意もまた社会を潤す力となる。こうした視点から、本日の企画は極めて意義深いものと感じております。

私は、台湾と日本の友好関係、特に相互支援という現象を善の循環という言葉で考えられると思います。他者を助けることは善です。助けられる側は感謝し、また恩返しをすることも善です。この2つの善が、2つの善のエネルギーが循環を形成します。これは善の循環という意味です。台湾と日本は正式な外交関係がありませんが、この歴史的な絆から発展、絆に基づいて発展してきた、そういう民間関係はとても親密で、友好的なものです。このような友好的な関係は、数え切れない、そういう善の循環の結果だと私は思います。

水が自然の中で循環し、命を育むように、「善もまた人ととの間で循環し、社会を潤す力となる」この視点から、バルトン氏の思想と私の「善の循環」は深く共鳴していると感じます。

私は、台湾と日本の友好関係、特に相互支援のあり方を、「善の循環」という言葉で捉えています。他者を助けることは善です。そして、助けられた側が感謝し、恩返しをすることもまた善です。この二つの善意が互いに響き合い、循環を生み出す。それが「善の循環」の本質です。

台湾と日本は、正式な外交関係こそありませんが、歴史的な絆に基づいて築かれてきた民間の交流は、非常に親密で、友好的なものです。私は、このような関係性こそ、数え切れない善意の積み重ね、すなわち「善の循環」の結果であると確信しています。

善の循環という言葉は、今、日本でも使われていますが、特に台湾では、広範囲にわたって広く使われています。また、その善の循環の概念は、私が台日

友好を推進する時の哲学的基礎となるものであります。

『都市の医師バルトン』を継承して台湾と日本の未来を豊かに

さて、バルトン氏に関するのですが、私は駐日大使を着任して間もなく、稻場先生から『都市の医師バルトン』という本を寄贈されました。その本を読んでから、私は、初めてバルトン氏のことを知りました。そして私は、とても恥ずかしい気持ちになりました。なぜなら、私は台湾人で、また台北生まれ台北育ち、市会議員、国会議員も務めたことがあるにもかかわらず、台湾の、私は台湾の水道水、何十年も飲んできましたが、台北市の水道のために命をささげた恩人であるバルトン氏を全く知らなかつたからです。

その空白を補うために、私は 2020 年 8 月 8 日、ちょうど今日と同じ日、私は、バルトン氏の墓参に参加しました。あの時も稻場先生が主催した墓参です。その墓参は、私が初めて墓参に来た台湾人であるかどうかは分かりませんが、台湾の代表として墓参に参加したことは確かであります。その墓参の後、私と稻場先生は、特に台北市政、バルトン先生の銅像を「台北自來水博物館」に再現し設置するよう働きかけました。

銅像除幕式では、台北市政府、日本の駐台北代表と、イギリスの駐台湾代表を招待いたしました。当時、私は代表として東京におりましたので、代表処でもリモートで生中継しまして、またバルトン氏の玄孫で、今は東北に住んでいる音楽家のケビン・メッツさんを代表処に招待して、参加していただきました。この一連の活動に加え、さつき申した『都市の医師バルトン』という本の翻訳は、鄧淑晶さん姉妹によって翻訳され、台湾で発行されました。

そういう一連のことで、バルトン氏も台湾でますます多くの人に知られるようになりました。特に 2020 年の 10 月には、台南市の水道博物館に濱野弥四郎の銅像が設置され、バルトン氏と濱野さんという師弟関係と教えが、台湾メディアで広く報道されました。そういう経緯でバルトン氏の台湾での知名度は、すこぶる良好となっています。

次に重要なのは、もっと多くの台湾の人がバルトン氏の思想を理解し、バルトン氏を記念する意義について考えることです。稻場先生の著作の中で、作家、司馬遼太郎の言葉が引用されています。つまり、歴史を書くのは未来のためにあると。私たちがバルトン氏を顕彰する意義も未来のためだと思います。台湾の未来、日本の未来、さらに全人類の未来のためであると考えています。

善の循環を進化する

次に、私は 2 つに分けて説明します。1 つは、善の循環を進化すること。2 番

目は、世界の平和を促進すること。バルトン氏は、当時、日本政府に依頼され、台湾で公衆衛生の仕事をしました。当時、台湾は悪疫の島と呼ばれて、伝染病が流行している島でした。バルトン氏は、危険を承知の上で、後藤新平の依頼を拒否することもなかったし、また職を退くこともありませんでした。ただし最後残念ながら、疫病に感染されて亡くなりました。

その台湾の公衆衛生のために命をささげた人に対して、もちろん台湾の人は感謝すべきです。彼は日本と台湾の架け橋であり、また日本と台湾の友好のあかしでもあります。台湾の人々は、感謝するだけではなくて、彼の精神、彼の思想を継承し、活用すべきだと思います。これは、善の循環の最良、最高の例だと思います。

世界の平和を促進する

2番目は、世界の平和であります。現在は世界が大混乱の時代で、いつ戦争が起こるか分からない状況で、平和が分からない時代です。しかし、戦争の特徴は、建設を迫害し、人々の幸福を奪うことです。つまり相手の命を奪う、相手の建設を迫害すること、これが戦争です。バルトン先生が行ったこと、バルトン先生の思想は、人々の幸せのために公共建設を行うことです。

また、この上下水道は、人々の幸せ、幸福を促進することです。ですから、バルトン氏の思想、彼のやり方と戦争とは、全く対立あるいは反対する論理であります。私たちがバルトン氏の思想を広め、善の循環を世界スケールに広げることができれば、必ず世界の平和、世界の平和の促進に役立つことができると信じています。これは、1人の台湾人の考え方で、バルトン氏を記念することがなぜこんなに重要なのかということの私なりの考えです。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

榊原政博氏ご挨拶

政博と申します。バルトンさんの娘、多満さんの旦那が榊原姓であります。私の父はその榊原正雄の3番目の子、政弥と申しますが、私は息子の政博でございます。

実は、祖母の多満さんとは会ったことはないんですね。生きている間は。と言いますのは、戦争中、彼女は京都にいたのですが、私の父母は宇都宮に疎開していたんです。私は、宇都宮で生まれたのですが、そのあと、私の父が三沢の米軍基地に職を得たので、三沢の方に引っ越ししたんですね。三沢に引っ越しして、父がその職場で、だいぶ、重宝されたと言うのでしょうか、最初は通訳ということで入ったようでしたが、その後いろいろやったようなんですが、三沢で勤め始めて間もなく、多満さんが亡くなりまして、就職してすぐ忌引きっていうのは気が引けると、というようなことで、何て言うのでしょうか。私が学校を終えて就職した頃だったら、親兄弟の死んだ時の忌引きなんて当たり前でしょうが、父はそういうことはしないということで、結局、多満さんの葬儀には、母と私が出了しました。私が4歳か5歳ぐらいの時だったと思います。多満さんは私の祖母なんですが、存命中にはお会いしたことがないんですね。葬儀の時の写真があったのやら、どうなのやら。私が小学校に入る前でしたので、そのことはほとんどわかりませんでした。

京都で葬儀があったのですが、その道中も、あるいは帰ってきてからも、だんだん物心ついていろいろ分かるようになってからも、両親とも、私の祖母の父がこういう人で、あなたはその子孫なんだよ、とういうような話は一切しませんでしたね。まあ、何て言うのでしょうか、自分は自分、まあ、偉い人が先祖にいてもそれをその自慢するものではないという考があったようです。自慢するのでなかつたとしても、こういう人がいたんだよということくらい教えてくれりや良かったのにと思いますが、ずっと知らずに來ました。

高校のころから日本人離れしてるからというので、いろいろいじられたりしましたけれども、大学に入って、勉強して、獣医師の免許を取ったんです。それで、主に牛を診療する家畜診療所に勤務しました。そこに10年以上居たのかな、そこに北里大学、私は北海道酪農学園大学なんですが、三沢市の隣の十和田市に北里大学ってところがあって、そこを卒業した者が家畜診療所に入ってきました、3年ぐらい経ったころでしょうか、私がその診療所長になったのですが、農家を回っていた時に、「あんたが所長？Aさんの方が歳いってるんじゃないの？」、「彼は私より7つも下なんですよ」、私より7つも年下な人を私よりも偉いんじゃないの、みたいなことを農家の人に言われて、ちょっとショッ

クでしたね。で、どうしたか？（ひげを指して）これですよ。少し威厳をつけると思って生やしました。今は、頭髪もだいぶ白くなったのと同じで、ここも白くて、（バルトンの写真を指差しながら）こんな黒々していないのが残念（もう間もなく79歳になることもあります）なんですけれどもね。

今日はこんなにたくさん的人が集まって、そして皆さんがこうして、バルトンのことを顕彰して、台湾からまで来られてという、ものすごく誇らしく思います。これからもよろしくお願ひいたします。

バルトン忌 2025 挨拶

島根県立大学准教授 濱野靖一郎

本日は、2025年バルトン忌の開催、誠におめでとうございます。この素晴らしい場で挨拶をする機会をいただき、嬉しく思っております。私、島根県立大学准教授の濱野靖一郎と申します。皆様がバルトンの高弟としてご存じの濱野弥四郎は、私の曾祖父です。本来ならば直接ここで話すべきなのですが、家族の都合で欠席となり、申し訳ありません。代読していただく同僚の深串先生に感謝申し上げます。

昭和7年に亡くなった曾祖父について、祖父から聞いたことはありません。私が歴史に興味を持ちだした頃は既に体調が悪化しており、中学に上がる直前で亡くなってしまったからです。家族の団らんの中、曾祖父について研究しているという稻場先生の話題が出ました。その時初めて、私は自分の曾祖父が長く台湾で水道事業に従事していたと知った、というのが実態です。父も生まれは昭和10年ですから、弥四郎がどのような人であったか直接は知りません。私にとって弥四郎は、初めから歴史上の人でした。

私は大学で日本政治思想史を担当しており、頬山陽を中心に徳川時代から明治時代が主な研究対象です。研究においてその子孫と面会し、残された資料や伝わっている話を伺ったことも幾度かありました。翻って考えますと、我が家に弥四郎のものは何も伝わっておらず、伝え聞いた話も殆どありません。これはあまりに寂しい現状ですが、受け止めるしかありません。

父が80になったあたりでしょうか、多磨墓地まで行くのは大変だ、としてその墓仕舞いをして後楽園のこんにゃく閻魔の納骨堂に墓を移してしまいました。昨年の3月に父は亡くなり、かつての墓をよく知っている人はもはやおりません。これは、私が地方に職を得た故に上手く墓を継承できなかつたからでもありますが、長く眠っていた墓を追い出され手狭な所に移された弥四郎のことを思いますと、申し訳なく感じております。

何とも情けない話ばかりですが、昨年の秋にとても嬉しいことがありました。松江バルトン会が主催し、松江の島根大学図書館で開催された展示会「松江市における衛生思想の歴史と今」に招かれたのです。そこに展示された、稻場先生の持参された弥四郎が使っていたバルトンのテキストを手に取ると、そこには祖父の署名が書き込まれておりました。それは私にとって、初めて弥四郎を「生きた人間」として感じることができた経験です。子孫が散逸してしまったものと、研究者の収集によって再び巡り会うことが出来た、という喜びは、同じ研究者としてとても深く強いものがありました。

バルトン忌が現在まで開催されて、イギリス・日本・台湾におけるバルトンの営為が確認され伝えられてきたことは、その三ヶ国同士をそれぞれ繋ぎ、また、そこでバルトンと縁を持った人々を通して、過去と現在をも繋いできたのではないでしょうか。弥四郎ももちろん、その中の1人だと考えております。

また、東アジアの近代において、水道を中心に公衆衛生というそれまで馴染みがなかった概念を人々に教え、確かな発展へと進めたバルトンの生涯は、これからもこの平和な生活を我々が守り伝えていくためにも、幾度も振り返り確認していく必要があると思います。国外では戦争状態が続き、国内も些か不穏な状況となっております現在、その意義は更に高まっているのではないでしょうか。

子孫と雖も先人の功績を守り伝えていくことは難しい、というのが現状だと思われます。それだけに、バルトンや弥四郎といった人達に目を向け顕彰していく事業は、とても重要で有り難いことです。本日のこの会が、さらなるバルトン顕彰へと続いていくことを願いまして、拙いですが挨拶とさせていただきます。

バルトン忌 2025 ご挨拶

台湾世界遺産登録応援会 八田修一

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました八田と申します。

私の祖父、八田 與一について、ご存知の方ばかりではないと思いますので、少し紹介させていただきます。八田 與一は東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業し、1910 年に台湾に渡りました。その時の上司が濱野弥四郎先生です。その後、濱野弥四郎先生について、台湾の各地を測量調査する機会があり、結果として台湾の南部に嘉南大圳という大きなダムを作ることがきたと思っております。

したがってバルトン先生が濱野弥四郎さんを連れて台湾に渡り、濱野弥四郎先生が台湾に上下水道を 150 以上作られるということがなければ、そして祖父と出会っていなければ、祖父が台湾に、嘉南大圳という灌漑大用水路を作ったということもなかつたかもしれません。

今日、皆さんにお見せしたいと思って持ってきた本があります。それは、先ほど謝長廷元大使もお話されていた『都市の医師』、稻場先生が書かれたこの本を持ってまいりました。と言っても私が買い求めたものではなく、私の父が稻場先生からいただいたものです。父は祖父と同様、東京帝国大学工科大学土木工学科を昭和 19 年に卒業、出征しました。

金沢の北国新聞社出版『父の背中』という本がありまして、そこに書かれている父の手記を読んで、なぜ父が祖父と同じ土木技師の道を歩んだのかがわかりました。祖母は父を医者にしたかったようす。やはりお医者さんが一番と思っていたようです。祖父が嘉南大圳工事の後に、あるいは工事中に日本からも海外からもいろいろな偉い土木技師の方々がいっぱい見学に来られたようでした。そういうた祖父の姿を見て、土木技師という仕事もまんざら悪いものではないな、と思ったに違いありません。父は多少照れて自分が何をやりたいとか言わなかつたようですが、祖父と同じ道に進むのだったら、祖父から文句は言われないだろう、という風に書いてありました。

毎年 5 月 8 日、祖父の命日に地元台湾の方々が烏山頭ダムの畔で慰靈祭をしていただいております。父は 2016 年 5 月 8 日の慰靈祭に出席した後、帰国して 10 日程で亡くなりました。私は遺品整理する中でいろんなものを整理しましたけども、いくつかの土木関係の本で、これはと思うものは簡単にはちょっと捨てられないなと感じておりました。その中の 1 冊がこの本でした。裏書きのページに万年筆で、稻場紀久雄、大阪経済大学教授、それから住所と電話番号が書いてあります。稻場先生は、1965 年京都大学を卒業され、同年建設省入省、

都市局下水道課と書いてありました。

私の父も、大学を出て戦争に狩り出され、戻ってきてから、当時は内務省、一括採用ということですが、その後の建設省、今の国土交通省に就職しまして、地方巡り、地方の県庁、県の土木部を転々としまして、鳥取県で土木部長、そして最後は愛知県の土木部長でした。鳥取県の時はちょうど知事が、石破二朗氏、石破茂総理のお父上だった時でした。石破総理は多分私より 1 つか 2 つ年上ですが、お会いしたことはありませんでした。

この本を見ると、いたるところにピンクのマーカーが引いてあります。私はピンクのマーカーなんか使いませんから、引いたのは父です。上の付箋は私ですが、付箋ですから剥がしたら綺麗に剥がれます。このピンクのマーカーの 1 箇所に、「濱野の部下に八田 興一、高橋陣弥という二人の技師がいた」と書いてあります。この後をちょっと読むと、その高橋さんという方と興一が、担当業務を交代して、灌漑関係の仕事に興一がついたということでした。皆さん、このような話を聞かされて面白いですか？（笑い）

私はこういうところ読むと、こういうことがあって、あの濱野先生の部下になり、そして測量設計をして、あの嘉南大圳という仕事に行きついたのか、と思うとなかなかこのような本は捨てられません。絶対捨てられないなと思い、今日は稻場先生にこれを見ていただきたいなと思って持ってきました。書いてある中身はご存じでしょうが、マーカーをどこに引いたのかだけでも見ていただけたら嬉しいです、という気持ちです。

興一は、濱野先生が亡くなられたのち濱野先生への恩返しをしなくちゃいけない、銅像を作ろうということになりました。ある本には駆けずり回つてと書いてましたが、東奔西走して台南の山上上水道に銅像を作りました。だいぶ経ってその銅像が台風で壊れてしまったのですね。

台湾の奇美実業という会社の創業者だった許文龍先生、亡くなられたんすが、こんどは許文龍先生に改めて銅像を作っていただきました。今、台南上水道にある濱野先生の銅像は、許文龍さんが自分で作ったのか、あるいは許文龍さんは博物館をもっているのですが、博物館に勤めていらっしゃる美術の教授に作らせたのか、はっきり覚えていませんけども、濱野さんの銅像があります。

実は、八田興一の銅像というのもありますし、石川県の先生が作られたんすけども。2014 年、あるいは 15 年だったかな、その銅像の首が切られるという事件があったんすよ。4 月の 17 日。首が切られて首はぽんと落っこちて。犯人はすぐ捕まったのですけども、その時に、今の、賴清德総統が、台南市長をされていて、賴さんが出した号令が 2 つありました。ひとつは、必ず犯人を捕まろ、もうひとつは、すぐに直せということだったのです。犯人は、愉快犯だっ

たようで、5月8日の慰靈祭の時にその首が参列者の面前でコロンと落ちたら楽しいだろうと思ったのでしよう。私が連絡を受けたのが4月の18日ぐらいだったと思いますから、もう2週間もない、とても今回は修復することは無理だろうと思っていました。

当時、烏山頭ダムを管理されている嘉南農田水利組合会という組合があります。今は政府の所管になって嘉南農田水利署になっていますけども、そちらの会長さんから何としても来て下さいと連絡がありました。私も毎年行っておりましたから、そんなことぐらい日本と台湾の交流関係が絶対崩れることないぞ、ということを証明する意味もあって、私は必ず行きますと返事をし、行って参りました。すると、なんと、5月8日の前日の7日の日の朝に急に連絡があつて、今から除幕式をやるから来いと言われまして、何の除幕式やるのかよくわからなかつたのですが、その銅像の切られた首を繋ぎ合わせたから、除幕式やるんだというようなことでした。台南市長だった賴清德さんが皆を呼び集めました。そこに私も呼ばれて、どうせ翌日行くつもりでしたから、台北に居たんすけども、行ってみたら直っていたということなんすよ。どうやって直したのか？

これには二通りの直し方があつて、一つは、祖父の銅像っていうのは座って考えているような形、台湾では「考える人」と呼ばれているような銅像なのですが、ちょっと盗まれる危険もあったということで母型（おもかた）を取っていたんですね。その母型があることは私も知っていたんです。水利署の2階に置いてありましたから。あれを使って直すことはできるのでしょうかけど、まさか、2週間ではできませんから、どうやって直したのかなと思っていたら、実は、許文龍先生がもともと胸像の複製を4体か5体作ってらっしゃったと。その一体を、供出していただいて、先ほどの博物館の美術の先生と一緒に派遣して、同じように角度を合わせ、くっつけて、繋ぎ合わせて、色を塗って、ということをやってようやく直ったそうです。すから、本当にびっくりしました。私の、最初の感想は、おじいちゃん若返ったねって思いました。なぜかというと、首から下は数十年風雨にさらされてきたのに、首から上は、博物館にあつたものを合わせていますので、綺麗なものですよね。いくら色を同じように見せても、なんか、風合いが若返ったねって言つたら、喜んでいるのかどうなのか、よく分からぬ顔してました。

與一は、昭和17年、1942年に亡くなりました。濱野先生が亡くなられた1932年のちょうど10年後に、アメリカの潜水艦にやられて亡くなりました。父は、先ほどの（バルトン先生のご子孫の）榎原さんといつしよで、自分の父については何も言わないんですよ。おばたちからはあなたのおじいちゃんは偉

かったのよって言われて、何がって聞くと、台湾で大きいダム作ったって言うんですよ。小さいころは、それが何で偉いのかよく分からなかったのです。日本にはダムと呼ばれるものが数千あります。それを作った人はたくさんいらっしゃるのに、台湾にダムを作ったぐらいのことで、何がそんなに偉いのかなと思っていました。父が亡くなつてから台湾で行われている慰靈祭に毎年出かけておりますけども、台湾の方々が感謝のお気持ち持ち続けてくださつてます。先ほどの謝長廷さんがおっしゃつた水の循環、そして、善の循環が本当に戻つてくる。戻つてきつてるんだなっていうふうに思ひまして、私自身も日本と台湾の交流の一つ二つ、架け橋の下の石材の石ころのひとつぐらいにはならなくちやいけないなと思って、今は、台湾世界遺産登録応援会というところで理事をしております。台湾には世界遺産がひとつもありません。なんとか生きてる間に世界遺産をひとつ抑えたいと思って、微力ながら一生懸命であります。

最初に申し上げたかったのことですが、日本水循環文化研究会の皆さんに御札を申し上げます。このような素晴らしいバルトン先生の、慰靈を何十年も続けて頂いてるというのは、本当に今年になるまで知りませんした。もう少し早く知つていれば、もっと早くから参加できたらと思っております。これからもなるべく長く続けていただけることを祈念しております。本日はありがとうございました。(拍手)

W.K.バルトンの妹 画家メアリー・ローズ (Mary Rose Hill Burton)

メアリー・ローズが描いた明治 27(1894)年の東京の風景

130 年の旅をして日本に帰ってきた水彩画二点

日本水循環文化研究協会 稲場日出子

スコットランドからの奇跡のような贈り物「東京・亀戸の藤」

2023 年 12 月 スコットランドの大切な友人 アラン・威尔ソンご夫妻から「メアリー・ローズの水彩画を、オックスフォードのオークションで見つけました。稻場さん夫妻に！」というメールがあり、取扱注意の紙が貼られた大きな箱が届いた。

A. ウィルソンさんは、第 2 回バルトン賞を受賞されたバルトン顕彰の功労者である。

「バルトン先生、明治の日本を駆ける！」の出版と、「土木学会出版文化賞」授賞を喜んでくださり、ありがたいことに、何かお祝いを...と探してくださっていたらしい。

箱を開くと、Mary Rose Hill Burton のサインのある日本の風景の水彩画が現れた。

サイズは 38 cm × 25 cm 保存状態は完璧で、幼い女の子と若い母親が、藤棚のある池のそばで、鯉に餌遣りをしている情景で、19 世紀の画家らしく、光と影、水面のきらめき、花と人々の自然な姿が描かれ、どこか江戸情緒が感じられた。

「奇跡としか思えません。」とお礼を申し上げ、すぐにこの水彩画について調べ始めた。



2005年ロンドンでの調査で、国立アート・ライブラリー所蔵のメアリー・ローズの個展「Japan The Land of Flowers」のカタログのコピーを入手することができた。文字だけの小さなカタログだが、画題は興味深く、ぜひ見たい作品ばかりであった。

みつけました！ カタログ No.22 Feeding Carp under the Wisteria (see No.8)
指示通り、カタログ No.8 を見ると

Tea-House Kameida Tokyo

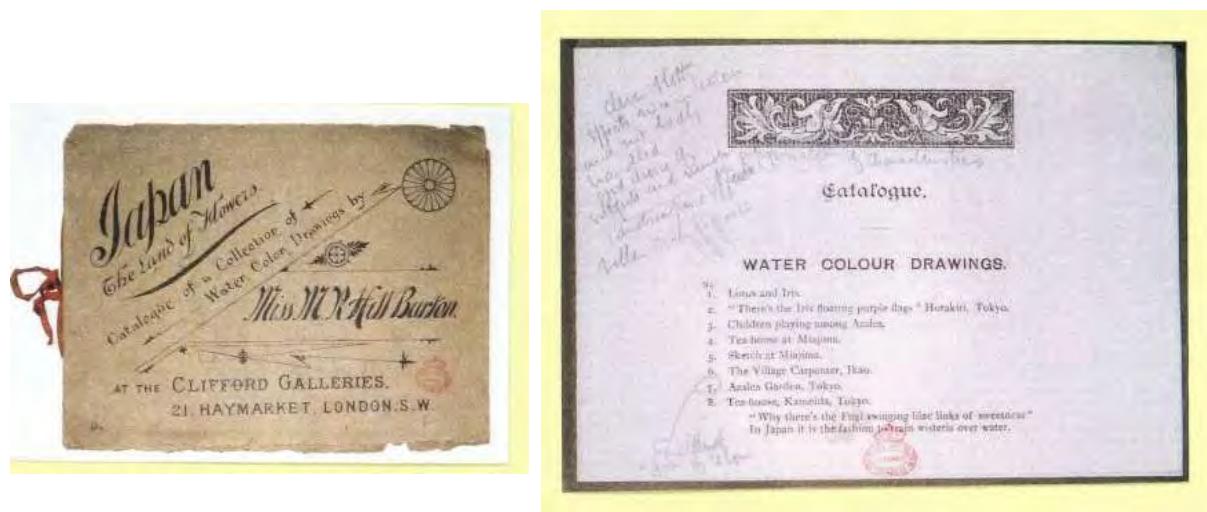
“Why there's the Fuji swinging lilac links of sweetness”

In Japan it is the fashion to train wisteria over water.

この水彩画が描かれた場所は、Kameida となっているが、藤の名所 東京・江東区・亀戸に違いない。

廣重の「江戸百景」にも描かれ、亀戸天神では今も五月に「藤祭り」が行われる。

メアリー・ローズは、日本人々が水辺に藤棚を作り、ゆらゆら揺れる藤の花を愛でる様子に心惹かれ、提灯の明かりの下で、鯉に餌遣りをする母子の温かな姿に頬笑みながら、この水彩画を描いたことだろう。



V&A 美術館 国立アート・ライブラリー所蔵の個展のカタログ

130 年前の隅田川河畔のお花見 「東京・向島の桜並木の道」

2024 年 12 月 16 日 英国から二作品目のメアリー・ローズの水彩画が届いた。

それは「英国バークシャーの閉店する画廊の店主が Mary Rose Hill Burton の水彩画をオークションに出す、という情報があります。この絵を入手したいですか？」という A. ウィルソンさんからの画の写真のファイル付きのメールから始まった。

どこか見覚えのある江戸情緒あふれる桜の絵に私たちは「ぜひ！」とお願いした。

ウィルソンさんは「日本の研究者のために...」と、適価で購入できるように店主を説得してくださり、支払や関税の手続きは、日本スコットランド協会理事の稻永さんが手を貸してくださった。

こうしてあっという間に英国バークシャーから京都へ魔法のように画が飛んできた！



「Japan The Land of Flowers」のカタログで探してみると、すぐに見つかった。

No.53 Cherry Tree Avenue, Mukojima, Tokyo

隅田川向島の桜は、昔も今もお花見の名所であり、子ども達も女性達もお年寄りも連れ立って満開の桜を愛でる様子に、メアリー・ローズは心を奪われたことだろう。

嬉しいことにこの画は、兄ウイリーの写真とのコラボレーション作品であった。

船着き場の写真もあり、船で向島に着き、お花見を楽しむ兄妹の姿が目に浮かぶ。

W.K.バルトン 結婚記念の写真集「日本の戸外生活」より



V&A National Art Library 所蔵

写真や資料で読み解く W.K.バルトンとメアリー・ローズとその家族

130年以上の時を超えて、現代へと続く物語をご一緒に！

1. 画家志望の青年と名家の令嬢の恋

18世紀末、ロンドンの画塾で才能を認められ、画家になることを嘱望されたウイリム・キニモンド・バートンという若者がいた。ナポレオン軍の侵攻に備える英國軍の志願兵となり、スコットランド北部の都市アバディーンに赴任。その任地で、アバディーンきっての名家パットン家の美しい令嬢イライザと恋に落ち、困難を乗り越えて結婚する。

この二人が父方の祖父母で、W.K.バルトンは祖父の名と美術の才を受け継ぐことになる。

2. 父 ジョン・ヒル・バートンと 母 キャサリン・イネスの結婚

父ジョン・ヒル・バートン（1809—1881）は、1. のバートン家の次男で、苦学してアバディーン法律学校、マリシャルカレッジで法律を学び、弁護士としてエдинバラで任務にあたる。やがて、思想家デーヴィッド・ヒュームの評伝など多数の書物を執筆し、王室歴史編纂者として、スコットランド史全巻を完成させた。

著書「ポリティカル・エコノミー」は、福沢諭吉が翻訳、日本でベストセラーとなった。

最初の夫人は3人の女の子を遺して早世し、3人はジョンの妹メアリーに預けられた。

バートン家の子ども達は慈愛に満ちた父が大好きで、父宛の手紙が何通も残されている。

Scot Abroad
「その地の人々の
幸いのために力を
尽くしなさい」



Scottish National Portrait Gallery 所蔵

National Library of Scotland 所蔵

1855年 友人のエдинバラ大学教授コスモ・イネスの長女 キャサリンと結婚し、エдинバラの自然豊かな地区ローリストン・プレイス 27番地に居住。

1856年5月11日 兄ウイリアム（後のW.K.バルトン ウイリーと呼ばれた）誕生

1857年8月29日 姉 ローズ誕生 1858年9月17日逝去
両親の悲しみは深く、生涯この「小さなローズちゃん」を忘れるることはなかった。

1859年7月10日 メアリー・ローズ誕生
叔母メアリーの名と、母方の祖母の家系、北部の貴族ローズ家から名付けられた。

1861年3月5日 16世紀の屋敷クレイグハウスに転居

1862年6月8日 弟 コスモ誕生 母方の祖父コスモ・イネスの名を受け継いだ。
子どもたちは、大好きなクレイグハウスで愛情深い両親のもと、のびのびと成長する。



クレイグハウス Craig House

3. 母キャサリンと子ども達

母キャサリン（1827-1898）は、向学心のある女性で、エдинバラ大学で医学や芸術の講義を受けていたと伝えられる。F.ナイチングールの呼びかけに応じ、クリミヤ戦争（1853～1856）の野戦病院で一冬を看護師として修道女たちと共に働いた。

ジョン・ヒル・バートンと結婚後も、女性の権利や人権のための活動を続ける。

コスモ・イネス教授撮影の家族写真には、右からウイリー、メアリー・ローズ、コスモ君を抱っこした母キャサリン、三姉マッティ、愛犬も（動かずに）写っている。



Scottish National Portrait Gallery 所蔵

4. 幸せな子ども時代...クレイグハウス

日本では幕末の 1860 年代初頭に撮影されたバートン家の人々の生き生きとした写真は、母方の祖父コスモ・イネス教授撮影の家族アルバムに収められたものである。

コスモ・イネス (1798—1874) は、弁護士であり、法律家として判事を務め、歴史家としても知られる。フランス語、ドイツ語、イタリア語、ギリシャ語、ラテン語も堪能で、バートン家の子どもたちは、自然に複数の言語を身につけるようになっていった。

1840 年代の写真の草創期に、エディンバラ写真家協会を立ち上げ、風格ある風景写真がスコットランド国立図書館に現存している。

ウイリーはとりわけ写真に熱中し、祖父イネス教授は、写真技術のすべてを伝授した。

美術と技術の総合芸術「写真」の世界に、ウイリーは生涯情熱を注ぐことになる。



コスモ・イネス夫妻



家族写真の撮影場所
インヴァーリース・ハウス

このころクレイグハウスにいつも遊びに来ていた、アーサー君という男の子がいた。

家庭の事情から、ジョン・ヒルの妹、社会活動家で教育者のメアリーの家で養育されていたが、3歳年長のウイリーを兄のように慕い、同じ年のメアリー・ローズとは仲良しで、美しい姉マッティに憧れ、兄弟のように育ち、このあたたかな関係は生涯続いた。

アーサー君は医師となるが、十代から物語を書き始め、ウイリーも父ジョン・ヒルも励まし支援した。やがてアーサー君は世界一有名な作家となる。

アーサー・コナン・ドイル...「シャーロック・ホームズ」の作者である。

後にウイリーを「わが最初の友にして終生の友」と書き「クレイグハウスでの楽しい日々」について語っている。

5. 画家への道

幼いころから聰明で、豊かな画才に恵まれたメアリー・ローズは、エдинバラの画塾で学び、社会学者ゲッデス (Sir Patric Geddes) のアンナ夫人等の芸術家グループに加わり、個性ある友人達と共に、プロフェッショナルの水彩画家として活躍を始める。

1877年 姉マッティ、オーストラリア出身のクレランド医師と結婚し、アデレードへ。

1878年 クレイグハウスを含む一帯が医療施設となる計画により、バートン一家はモートンハウスへ転居することとなる。塔のある魅力的な屋敷であった。

長姉イザベラが、アバディーン出身のロジャー医師と結婚する。

このころメアリー・ローズは、ミュンヘン、続いてパリに学び、パリではラファエル・コランやギュスターブ・クルトワのもとで修業し、特に人物画の芸術性と技術を高めていった。同じころ黒田清輝がラファエル・コランに師事していた。

1881年 偉大な父ジョン・ヒル・バートンが亡くなり、家族は悲しみにつつまれた。

母キャサリンが、亡きジョン・ヒルを偲んで書いた Memoir...回想記（ジョン・ヒルの著書に加筆）の挿絵に、メアリー・ローズが思い出のクレイグハウスを描いている。

ジョン・ヒルは、キャサリンとの約束通り、エдинバラ郊外ダルメニー教会の墓地に“小さなローズちゃん”と共に埋葬されることとなった。

その墓碑の神聖なケルト模様や文字は、メアリー・ローズがデザインし、二番目の姉で彫刻家のイライザが思いを込めて彫刻した。



モートンハウス Morton House



父ジョン・ヒル・バートン モートンハウスで逝去

6. ネス湖畔の別荘ボレスキンハウス

1882年 母キャサリンは、広いモートンハウスを手放し、アトリエと居住空間のあるモンペリエのフラットに家族と共に転居する。

1887年（明治20）兄ウイリー 日本政府に招聘され日本へ。日本ではバルトン先生！

1889年（明治22）弟コスモ 上海の大学に招聘され、夫人と共に日本経由で上海へ。

1890年（明治23）弟コスモ 天然痘にかかり急逝。上海外国人墓地に埋葬される。

祖父イネス教授によく似た賢く優しい、みんなに愛された末っ子コスモの死。

家族の悲しみは計り知れず、後年バルトンは上海の墓地を訪れ、祈りを捧げている。

1893年 キャサリンは、女性の権利運動や都会の喧騒から距離を置き、静かなネス湖畔に、別荘ボレスキンハウスを購入する。ネス湖に面する神秘的な館である。

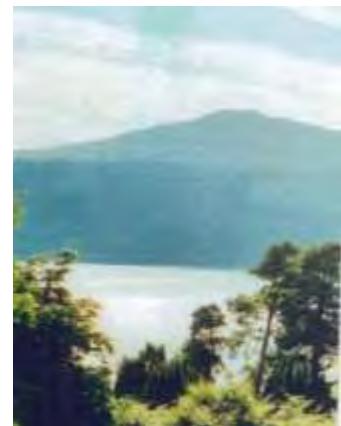
（曾孫の鳥海幸子さん宅に、どこの風景か分からぬメアリー・ローズの小さな額絵があった。それはボレスキンハウスから見たネス湖の風景であることが分かった。）



ボレスキンハウス Boleskine House



1894



2005

7. 兄の結婚 メアリー・ローズ いよいよ日本へ

1894年（明治27）兄ウイリーが、日英両政府から国際結婚の許可を得て、日本人女性 荒川満津と5月19日に結婚する運びとなり、バートン家としてメアリー・ローズが参列することとなった。

4月中旬、桜が満開の東京へメアリー・ローズがやってきた。

日本では、帝大の教師でバルトン先生と呼ばれている兄と、荒川満津の間には、二人の男の子が誕生したが、二人とも病気で夭折した。

「パパそっくりのかわいい坊やの写真を130年もの時を超えて見ていただくことができ、「ぼくも、いたの」というあどけない声が聞こえるようである。

満津の悲しみは深く、そのためにもバルトンは正式の結婚を急いだ、と伝えられる。

満津は、バルトンと他の女性の間に誕生した女の子多満を1歳頃から育てていた。

メアリー・ローズは、かわいい2歳のTamaのことを、友人への手紙に書いている。



バルトン撮影
(パパそっくり)



8. バルトン先生の妹も明治の日本を駆ける！

桜が満開の向島のお花見の写生から始まり、メアリー・ローズは兄と共に、あるいは、兄の友人の案内で、東京近郊や日本各地を訪れ、人々が季節の花を愛で、皆で楽しむ姿に感動し、釣りをする女性や働く女性に心惹かれながら、夢中で多くの水彩画を描いた。

東京・上野の桜 亀戸の藤やツツジ 堀切菖蒲園の花菖蒲 芝の増上寺 郊外の百合の庭 鎌倉の寺の蓮池 伊香保温泉 京都の鴨川の床 濱戸内海 宮島 広島 長崎...

「海外のスコットランド人」という作品は、長崎でグラバー氏を訪問したのであろうか。

北海道ではアイヌの村を訪ね「アイヌの長」「アイヌの少女」「アイヌの人々」を描く。

さらに 日本で活躍する女流画家達を訪ねて肖像画を描き、生け花の展示会、写真家の工房訪問、写真家協会の会合など、記録に残るだけでも、日本を駆け回る日々であった。

バルトンの結婚記念の写真集「日本の戸外生活」に、カンカン帽をかぶった謎の女性の後ろ姿が写っている。「もしかしてメアリー・ローズ？」「振り返らないかなあ」と研究者の間で話題になっていた。



9. バルトン撮影の家族の集合写真

日本スコットランド協会理事の稻永さんからいただいた、ルイーズ・ボアハム氏の講演録に、バルトン撮影の集合写真があり、思わず「うわあ！」と見入ってしまった。

所蔵は、Cleland's Papers とあり、姉マッティ宛に送られた写真のようである。

貴重な写真で、オーストラリアの大学とクレランド家に問い合わせ中である。

写真中央にメアリー・ローズが美しいドレス姿で扇を片手に立っている。

ボイさんの手にはカンカン帽！あの後ろ姿美人はメアリー・ローズに違いない。

中央の外国人は、帝大工学部主任ジョージ・ウエスト教授で、官舎が隣であった。

前列右 やや緊張した表情で座っているのが、バルトンの妻 満津さんである。

後列右の3人は、庭師の男衆と女中さん（当時の呼称）。

左端に立っている二人は、満津さんの姉、梅さんとその子息だと思われる。

ウェスト先生もメアリー・ローズも正装で、梅さんも黒紋付の羽織を着ているので、これは、1894年（明治27）5月19日 横浜の英國領事館での婚儀を終えて、自宅でのお祝いの記念写真に違いないが、バルトンが写っていないのが残念である。

後年バルトン家の火災で失われてしまった家族写真が、オーストラリアに存在し、メアリー・ローズや、家族の姿を目にすることができるのは、とても嬉しい。



10. 帰国後のメアリー・ローズ

1894年10月6日メアリー・ローズは、秋の気配の日本を離れて帰国途についた。

1895年 ロンドンの目抜き通り クリフォード画廊で「Japan The Land of Flowers」という個展を開き、大人気でほとんどの絵に買い手がついた。

1896年 さらに同じ画廊で「JAPAN」という個展を開き、評論家からも好評を得る。

ボレスキンハウスの近くの瀑布フォイヤーズの滝の水量が、アルミ会社の精錬のために減少する問題が発生、メアリー・ローズも説明会に出席したり、景観保護の活動に参加したり、「今のうちに」とフォイヤーズの滝の画を描いたり、と忙しい日々であった。

1897年 クリフォード画廊での個展「Catalogue of Pictures」というカタログがあり、フォイヤーズの滝の水彩画も多く含まれている。

1898年 エдинバラの大学ホールの大作の壁画を手掛け、美しい四季の花々を描いた。



母キャサリン、ボレスキンハウスで逝去・墓碑

墓碑は左から2番目の十字架

11月29日 母キャサリンが、ボレスキンハウスで急逝する。71年の愛に満ちた人生であった。メアリー・ローズは日本に打電し「ウイリー、すぐ帰国して！」と悲痛な手紙を送るが、台湾での工事が難局にあり、体調を崩していたバルトンの帰国は叶わなかった。

キャサリンは、ネス湖畔のカトリック教会墓地に埋葬され、永い眠りについた。

11. アレイスター・クロウリー登場

母亡き後、アレイスター・クロウリーなる怪人が、ボレスキンハウスを手に入れるためメアリーを脅し、1899年春メアリーはついに別荘を売り渡すことになってしまう。

アレイスター・クロウリーは、夜な夜な明かりを灯して、悪霊を呼ぶという黒魔術を行い、ボレスキンハウスを恐怖の館に変えてしまった。

20世紀後半、クロウリーを慕うヘヴィメタルの聖地となり、レッドツエッペリンのジミー・ペイジがこの家に住んだり、オジー・オズボーンが曲を作ったりした。

私達も近所の方に「あの家に行っちゃだめだよ」「何調べてるの?」とご注意を受けた。



12. 兄ウイリーの急逝

1899年(明治32)8月5日 兄ウイリー ... W.K.バルトンが、スコットランドへの帰国を目前にして、肝臓アプセスの急性症状で東大病院で亡くなる。

言葉にならない悲しみの中、メアリー・ローズは、残されたTamaのことを心配し、自分の遺言書 Will に、多満への遺産相続分を記した。



13. メアリー・ローズ ローマに死す

1900年（明治34）春 傷心のメアリー・ローズは、イタリアへの旅に出る。

6月5日 メアリー・ローズは、ローマの駅で倒れ、そのまま病院で帰らぬ人となった。

41歳。戸籍には脳梗塞と記されている。

鎮魂ミサの後メアリーは、ローマのサンロレンツォ教会カトリック墓地に埋葬された。



エディンバラ郊外 ネス湖畔 上海 東京 パリ オーストラリアと、遠く離れて眠る、この仲のよい家族の心は、今もしっかりとつながり、時と空間を超えて、クレイグハウスや、日本や台湾に現れ、心の通じ合う人々に働きかけて、人と人とを結びつけ、シンクロニシティ…共感の輪をつないで、多くの人に驚きと微笑みをもたらしている。

14. メアリー・ローズの魂は未来へ



(鹿島清兵衛 撮影)



バルトン先生の忘がたみ ... 絵の上手な多満ちゃん (Tama Burton)
右の写真は台北城外にて (小川一真 撮影)

バルトン先生の一人娘 多満 (1892~1950, 明治 25~昭和 25) は、満津に育てられ父バルトンが 1899 年 (明治 32) に亡くなった後も、永田町の官舎で、ベルツ博士夫妻や後藤新平夫妻、ジャパン・ウイークリーメール社主ブリンククリー夫妻などに家族のように見守られながら、築地にあるカトリック系の初等学校を卒業し、女学校に通学していた。

多満は、やはり幼いころから絵が上手で、女学校で描いた名画の模写は、美術の先生にほめられたという。また音楽にも生来の才があり、習っていた琴で、13 歳で師範の奥免状を受けている。



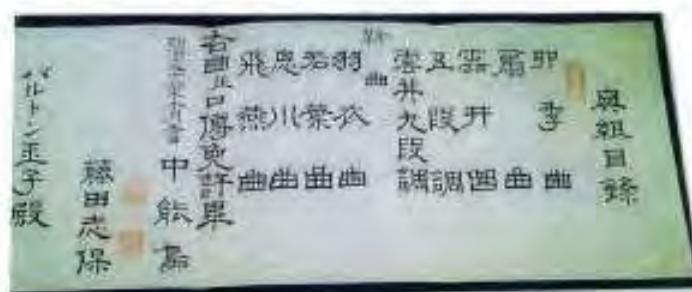
(左) レイノルズ「いろいろな角度の子供の肖像」
(右) ムリーリョ「善き牧舎としての幼児キリスト」





17歳の多満・バートン 中島待乳撮影

榎原政雄と結婚後の京都で、美人画の伊藤小波師のもとで描いた掛け軸が残されている。



筝曲の奥免状

15. 多満さんの長女...バルトン先生の孫 たえ子さん (1912~1990, 明治 45~平成 2)

多満さんの長女 樺原たえ子さんは、音楽の道に進み、ソプラノ歌手、ピアニストとして活躍。朝日新聞記者鳥海一郎氏と結婚し、戦時中の英國系であるための厳しい時期を超えて、鳥海音楽教室を開き、音楽の楽しさを伝え、合唱指揮者としても活躍された。



たえ子さんのコンサート
昭和 5 年 (1930) 浜松公会堂

16. バルトン先生の曾孫 鳥海幸子さん（1935～2024, 昭和 10～令和 6）

鳥海たえ子さんの長女 鳥海幸子さんは、母たえ子さんと同じ音楽の道に進み、ピアニストとして鳥海音楽教室を継承し、愛情をこめて生徒たちを指導。

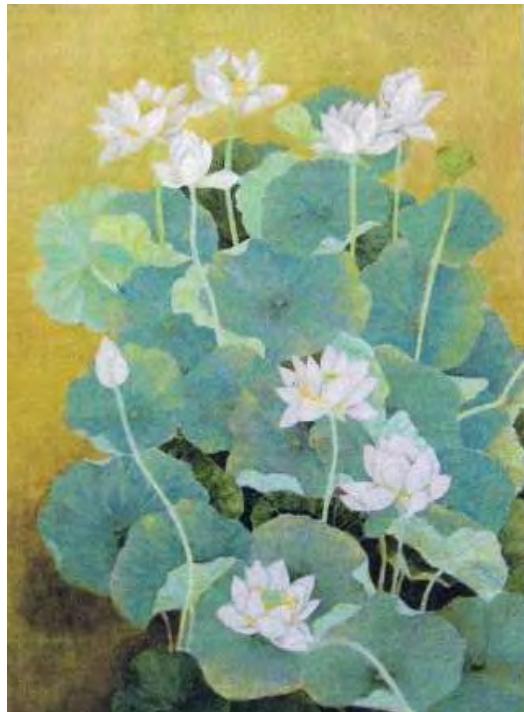
一方で、幼いころから大好きだった絵を描くことへの道を求めて、20 歳で日本画壇東方会に入門し、修行を経て日本画家としての道を究め、川端龍子賞を受賞する。

ピアノの生徒さんからも、日本画のお弟子さんからも「鳥海先生」と慕われた。



20 歳ごろの鳥海幸子さん

生徒さんにも友人にも、動植物にも小鳥にもやさしい幸子さん



第 42 回東方展 花浄土 鳥海幸子



終わりに

2024年 烏海幸子さんは、療養中の病院で、穏やかに旅立たれました。

亡くなられた日は、メアリー・ローズと同じ 6月 5 日で、不思議なつながりが感じられます。

今は、京都・衣笠の美しいカトリック墓地で、祖母多満さん、母たえ子さんと一緒に、安らかな眠りについておられます。

この原稿は、バルトン忌での講演内容を修正し、加筆させていただいたものです。

メアリー・ローズにご関心をもっていただけましたら、まことに幸いに存じます。

*

メアリー・ローズの 2 枚の水彩画は、2025 年 10 月 25 日～12 月 14 日「丸山晩霞記念館」（〒389-0515 長野県東御市常田 505-1）で開催される「明治の彩り—水彩画が語る時代展」に展示されることになりました。



謝 辞

没後 125 周年バルトン忌に、台北駐日経済文化代表処 謝 長廷前代表ご臨席のもと W.K. バルトンの曾孫 榊原政博様と、玄孫 榊原衛様をお迎えして、W.K.バルトンの妹メアリー・ローズ (Mary Rose Hill Burton) についてお話する機会をいただき、まことにありがとうございます。ご協賛の皆様と酒井理事長、鄧淑晶様に心より感謝申し上げます。

バルトンの松江市衛生事項に関する復命書と台灣 ～主に提出年月日に関する仮説～

稻場 紀久雄

稻場でございます。お配りした講演資料を全てお話しするのは時間的に無理なので、出来るだけ簡潔にお話します。私の話は、講演資料集に詳しく書いております。

本日は、バルトン先生の絶筆と思われる論文を持って来ました。当時日本で発行されていた英字新聞 Japan Weekly Mile の 1899 年 6 月 3 日に掲載された論文です。先生は、同年 8 月 5 日に亡くなりましたので、先生の絶筆の論文ではないかと思います。

論文の内容は、台湾、特に台北の環境衛生が悪い。何故かというと、平坦な地形のため、排水中の汚濁物が水路の底に溜まり、腐敗して病原菌が増殖する、硫化水素が発生する、ということで大変な状況になる。実は松江市の計画は、この論文の考え方を適用したものなのです。先生の日本での最後の本格的な仕事は松江と京都ですが、台湾に行かれても、松江のことが気になっていたと思われます。松江市の計画について、資料集の 42 ページに示した内務大臣西郷従道宛てた「復命書」を見て下さい。提出年月日の欄ですが、明治 32 年とありますが、月日が抜けています。おそらく英文の原稿を門下生が翻訳したのでしょう。ところが、復命書に付属する本文には明治 31 年 4 月 2 日とはっきり書かれています。この時には既に報告書ができていたのに、ほぼ 1 年間も保留され、明治 32 年になって提出文書を書いている。しかも、月日が抜けています。ともかく、この復命書が提出されたとすれば、この復命書こそ先生の絶筆ではないかと思います。それだけに、何故 1 年間も提出できなかつたのか、この点に関心を持たざるを得ないです。

その理由「1 年間も提出できなかつた理由は何か」を考えてみました。43 ページを見ていただきたいのですが、私は理由として 4 点考えました。

第 1 点は、すでに報告書は完成していたのですが、明治 31 年という年はバルトン先生にとって、大変重要な、大変忙しい年だったということ。この年の前半ですが、先生の周辺状況が激動しているわけです。まず、児玉源太郎が台湾総督として 2 月 26 日に赴任して来る。それから、先生の親友の後藤新平が 3 月 2 日民政局長になる。そして、3 ヶ月後の 6 月 20 日には民政長官に昇任する。先生ご本人も顧問技師の嘱託の期限が来て、その更新が必要になり、3 月 20 日に更新される。このように先生の周辺状況が目まぐるしく変わったのですね。そのために、復命書は用意できているのだけれども、出す時間がないというような状況だったような気がするのです。

第 2 点は、台北の水道水源調査ですね。残念なことに水源地調査の際に台湾特有の風土病に罹ってしまうわけです。その風土病も余程ひどかったとみえて、ジャパン・ウィークリー・メールの記事によると、同じ風土病に同じ時期にかかった 12 名の内、命ながらえたのはバルトン先生だけだったという記事があります。それほど激しい風土病から立ち直るにはやはり相当の期間が必要だったということですね。

第 3 点は、お母さんのキャサリンが、明治 31 年 (1898 年) 11 月 29 日に、お亡くなりになりました。妹のメアリー・ローズから 11 月 29 日、お母さんが亡くなったから、帰って来て欲しいという連絡が入ります。義兄からも、「バルトン君、君は長男じゃないか、長男の義務を果たすべきではないか。日本の仕事も大切かもしれないが」というような連絡が入ってですね、もう大

変なわけです。そういう状況に加え、年が明けて明治 32 年になると今度はアメーバ赤痢に罹って倒れてしまうわけです。度々苦難に襲われた大変な 1 年だったわけです。

第 4 点は、復命書の本文は完成しているけれど、問題は英文で書いてあったことですね。日本文ならすぐ出せるわけですが、英文だから翻訳しなければならない。この翻訳に当たった人は、おそらく高橋辰次郎だと思います。高橋辰次郎は、松江で行動を共にした先生の門下生です。この人は、英語が堪能です。ところが、翻訳しても提出するためにはご本人の許可が必要です。しかし、先生は、それどころじゃないわけです。風土病に罹って、死線を彷徨っているわけですから。さらに、お母さんが亡くなり、長男の義務を果たすべきだとまで言われてしまうわけですね。そういう状況ですから、了解を取るということ自体、大変だったと思うのです。そこで、了解を取るというところまでいかない。

ともかく明治 32 年になって、台湾の衛生改善の基本方針も決まり、時間ができたのです。それまでは、おそらく後藤新平が台湾は大変なんだからというので、強引に足止めをしてたわけですけれども、ようやく 60 日間の休暇を許可したのです。60 日間と言っても 2 ヶ月ですよ。2 ヶ月でスコットランドまで行って帰って来いってわけです。ちょっと当時の状況としては酷なことだと思いますけれども。いずれにしても休暇が出たので、明治 32 年の 5 月 10 日東京に戻って、帰国準備に入りますが、またしても風土病がぶり返すわけです。そして結局 8 月 5 日にこの世を去ったのです。こういう、状況でしたから、高橋もとっくに翻訳が終わって、何時でも提出できる状態ですが、先生の状況を考えると、なかなか出せません。ですから、果たして本当にこの復命書が提出できたのかどうか。私は、そのところはフィフティーフィフティーで、提出できなかつた可能性もあるとという気はします。

日本での最後の仕事には京都もあったわけですが、京都は何と言っても三高あり、京都帝国大学ありますから、人材がいるわけです。先生にしてみれば、松江の方が心配なわけです。京都は自分の門下生もおり、琵琶湖疏水の田辺朔郎など優れた技術者もいます。ですから、彼等に任せてもいいわけです。ところが、松江は、心配なわけです。そこで、復命書まで書いたのですね。復命書の内容もなかなか興味深いものがあります。抜粋部分だけでも読んで下さい。

（余話）大藤高彦と幻の京都市下水道計画

京都の方は安心していましたが、それなりの情報交換をしていたと思います。京都では、門下生の大藤高彦が計画を作ります。大藤の計画概要について資料集の 45 ページから 48 ページにかけて要点を抜粋しておきましたので、読んで下さい。

最後に、あえてお話したいことが 2 点あります。

第 1 点は、台湾でも松江でもそうなんですが、地面が平坦なので、汚濁物が溜まってしまうわけです。そうすると、細菌が増殖する、硫化水素が出る、そのほかいろいろな悪いこと出てくるわけです。その悪いことによって起こる被害に遭うのは貧しい人達なのです。富裕な人達は、綺麗な水を買って飲める。貧乏人は買えない。42 ページ上段の真ん中あたり、抜粋したところにも書いておきましたが、そういうことがはっきり述べられています。「富豪は、付近の岡や村落より飲料水を汲み上げて飲める。これは綺麗な水だ。貧しい人は飲めない」のだと。だから多くの人を助けなければならないのではないか。多くの人を助けるためにどうしたらいいのか。汚濁

物を溜めないような構造の排水路にしなければならない。台湾に渡って、「汚濁物を溜めない排水路は、どうしたら造れるのか」と懸命に考えるわけです。そして調査に調査を重ね、シンガポールでその参考例を見つけて、「よしこれでいこう」と解決策を決めるわけです。

このことに関連した情報が、京都の大藤高彦にもきっちり伝えられていようです。京都の報告書にもそういう考え方方がちゃんと書いてあるのです。この 48 ページの、原則の 5 ですが、計画を立てる時には汚濁物の堆積を防ぐことが大切で、どうしたら防げるかっていうことをちゃんと京都の計画にも書いてある。そして松江でもそのことを報告している。このジャパン・ウイーカリー・メールに掲載された論文も実はそういう内容なのです。最後の最後まで、「多くの人を救うのにどうしたらしいのか」ということに懸命に努力を傾けているのですね。

第 2 点は、その努力が今も続いている、埼玉の行田市で起こった、あの下水のマンホールから 4 人の作業員が転落して、硫化水素にやられた事件も起きていなかつたでしょう。バルトン先生が心配されたようなことが、その後、なおざりになつたんでしょうね。それで、こういう事件が今も起こっている。実は、現在の問題でもあるわけですよ。決して歴史上の問題じゃないのです。何故そうなつたのか。実はバルトン先生、あるいは門下生の高橋あるいは大藤高彦だとか、そういう人達の技術の系譜が現代に繋がっていない。現代に繋がっている技術は、要するに「単純に、拙速に、早く快適性を、早く利便性を、しかも安上がりで」達成しようと。そのように考へてどんどん、どんどん、そういう技術が、社会を席巻していくわけです。こうして、バルトン先生の技術の系譜というものが途絶えてしまったわけです。今、改めてそれを、見直すべきだと心から思います。 (完)

バルトンの松江市衛生事項に関する復命書と台湾

～主に提出月日に関する仮説～

(余話) 大藤高彦と幻の京都市下水道計画

稻場紀久雄

第1節 台北と松江

バルトンは、門下生の濱野彌四郎と共に明治29年（1896年）8月初め台北市街を踏査し、数多くの難問に遭遇した。難題の一つは、台北市街のあまりに平坦なこと。排水路の勾配が尋常な手段では取れず、汚濁物が排水路の底に沈殿してしまう。

沈殿した汚濁物は、腐敗する過程で病原菌を増殖させ、地下水汚染を激化し、気化したガス成分は悪臭を発し、大気を汚染する。どうすれば、汚濁物の沈殿を防げるか。バルトンは、あれこれ思案するうちに、思いは松江の市街地に移って行った。

松江の市街地は、宍道湖と地続きだから平坦で、地下水位が高い。生活雑排水は垂れ流れ、地下水を汚染している。病原菌が増殖すれば、悪疫流行だ。庶民は、汚染した井戸水を生活用水とし、飲用にさえ使っていた。清浄な井戸水を使える人は、限られた富裕層。一旦コレラや赤痢が流行すれば、大惨事になる。130年前、日清戦争勝利後の松江は、まさにそうした状況だった。松江の衛生環境は、台北と何ら変わりなかった。

バルトンは、濱野と相談し、東南アジアの先進居留地に解決のヒントを捜そうと考えた。二人は、明治29年（1896年）11月下旬から翌年（1897年）2月まで3カ月間、ヒントを捜し求めて上海、香港、シンガポールを調査した。そして、遂にシンガポールで自分達が沈殿を防げると考えていた形状の下水溝と管理制度に遭遇し、難題解決のヒントを得た。

バルトンは、濱野と共に喜び勇んで台北に戻り、直ちに乃木（希典）総督に報告し、『台北其ノ他ニ於ケル衛生工事設計ニ就キ意見』を建議。総督府評議会は、この建議を承認した。衛生改善対策は、当時の台湾統治にとって揺るがせに出来ない課題だったのである。

バルトンと濱野は、建議に基づいて、明治30年（1897年）7月から南部諸都市の調査に着手し、およそ2カ月後の9月10日乃木総督、総督府の関係部課長、市区改正委員、中央衛生会委員など責任者70余名を前に調査結果を報告し、最終的な整備方針案を説明した。こうして、台湾全土の衛生改善に対する基本方針が固まった。バルトンは、濱野と共に基隆に第一歩を印してからおよそ1年2カ月という短期間で基本方針を固めたわけである。二人の猛烈な仕事ぶりが伝わって来るようだ。

バルトンの脳裏には、この間、常に松江の問題が刻まれていた。基本方針が固まって時間に余裕が出来た明治30年（1897年）の秋から冬にかけて、バルトンは松江の衛生対策の検討に着手した。こうして、復命書は、明治31年（1898年）4月2日に脱稿され、松江で行動を共にした高橋（辰次郎）に郵送されたのであろう。高橋は、直ぐバルトンの英文の復命書を翻訳したが、最終的にバルトンの了解を取らなければ正式に内務省に提出できない。ところが、

高橋は日本国内、バルトンは台湾、二人を隔てる距離は極めて遠い。しかも、バルトンは、台湾全土の衛生対策の総責任者であり、超多忙。その上、明治 31 年(1898 年)という年は、思いも及ばない不幸がバルトンを次々と襲った最悪の年だった。このため、やむなく復命書の提出を延期せざるを得なかったと考えられる。そこで、以下に、先ず復命書の要点を、次に復命書の提出月日の遅延理由に関する私の仮説を紹介する。

【復命書の要点】

復命書(次頁の資料参照)は、提出年が明治 32 年(1899 年)、月日が空白の提出文書と、作成年月日が明治 31 年(1898 年)4 月 2 日と明記された復命本文からなる。提出月日が空白だから、復命書は提出されなかった可能性もある。仮に提出されていたとしても、復命本文の作成から提出までに何故 1 年もの期間を要したのか。この理由は、次項の仮説に譲るが、「バルトンが復命書に拘った理由」に関して私見を述べておきたい。この点が復命本文の内容に深く関係するためである。

仮に提出遅延の理由が提出文書中の「平面測量並に高低測量の実施の必要性」だけなら、もっと早く提出出来た可能性があるだろうし、場合によれば踏査を共にした門下生の高橋辰次郎に代筆してもらうことも可能だっただろう。だが、バルトンには、どうしても“直接伝えなければならない”と考えた理由があったのだろう。その理由は、何か。

松江市の下水溝は勾配がなく、下水は地中に浸透し、種々の沈殿物が溝の底に溜まる欠陥があった。沈殿物は、腐敗し、人身に影響を及ぼした。ところが、シンガポールで改良された下水溝を見聞し、その実例を基に現在台北で学理上有効な下水溝の試作と実用化の実験が進んでいる。その結果が間もなく出る。そこで、松江の衛生対策は、もうしばらく待って、その結果を踏まえて講じた方が良い。バルトンは、真剣にそう考えていたのだろう。

バルトンには、「富豪は、清良な飲用水を使えるが、貧しい人々は汚れた水しか使えない。一度悪疫が流行すると、貧しい人々が真っ先に甚大な被害に遭う。このような事態を引き起こしてはならない。衛生工学者は、そのために存在しているのだ」という堅い信念があった。バルトンは、内務省から松江市の下水排出の改良を命じられた訳では無かった。しかし、松江市の実情を見てしまった以上、放置することは出来なかったのだ。父ジョン・ヒル譲りの生粋のベンサミアンだったバルトンは、この思いから復命書の提出に拘り続けていた。門下生・高橋は、師バルトンのこの思いを誰よりも分かっていた。

ここで、注意すべき点がある。バルトンは、高価な西欧型の最新施設を松江に造ろうとしていたわけではない。一人でも多くの人命を投入可能な資金の範囲内で救おうとしていたのである。この点を忘れてはならない。バルトンの考えは、現代に於いても発展途上国の技術支援の基本原則ではないだろうか。かつて日本下水文化研究会が、そして現在は日本水循環文化研究協会がバルトン忌を開催し、バルトン賞を贈っている基本的な思いは、この基本原則を大事にし、何時までも持続的に伝えたいという願いにある。

資料

松江市衛生事項並ニ右改良方法ニ

閔スル復命書

余ハ島根県松江市ニ於テ施工スヘキ給水ノ方法如何ニ付
実地検分ノ上復命スヘキ御命令ニ依リ、去ル明治廿八年
中土木監督署技師高橋辰次郎ト共ニ同市ニ出張ノ上右検
分ヲ遂ケ候處、予定水源地數多アリテ夫ノ撰定ニ關シテ
ハ各水源地ニ付平面測量並ニ高低測量ヲ施行スヘキ必要
有之、其結果ニ依ラサレハ確タル復命難致次第三付、右
測量ノ儀同市長ニ依頼セシニ、施行ノ都合上時日遷延ノ
後該結果ヲ得タルニ依リ、其當時復命スル能ハスシテ今
日別紙復命書ヲ提出スルノ不得已次第ナルハ聊カ遺憾ナ
キ不能次第三有之候。左ニ要領ヲ記シ此段及復命候也。

明治三十二年月日

ダブリュー・ケイ・バルトン

内務大臣 侯爵 西郷従道殿

本板水

現今ノ飲料水ハ多ク底淺キ堀井戸ヨリ汲取ルモノナルカ
故ニ水質甚宜シカラス。而シテ此人口繁栄ノ市街ニ在テ
ハ此種ノ給水方法ハ必ス排斥スヘキモノナリ。

該市居住ノ富豪者ハ附近ノ岡丘又ハ村落ヨリ飲用水ヲ汲
取り使用セリ。此飲用水ハ清良ナリトノ事ニテ余モ亦必
清良ナルベシト信ス。

右ニ反シ貧者ハ市内ニ存在スル底淺キ井水或ハ湖水又ハ
湖水ヨリ引入タル溝渠ノ水ヲ以テ飲料ニ供セリ。故ニ右
等水質ノ不良ナルハ言ヲ俟タス。右清水、湖水及溝渠水
中何レカ最不良ナルカハ直ニ判定シ得ルモノニ非サレト
モ、恐ラクハ井水ナランカ。兎ハ云ヘ前記三種ノ水質ハ
何レモ不良ナリト断言スルモノナリ。

余ハ今此復命書ヲ認ムルニ当リ前記各種ノ病症ニ付テハ
松江病院長医学士山崎幹氏ノ説明ニ拠レル所多ク、深ク
同氏ニ謝セサルヲ得ス。同氏ノ説明中、夏時湖水ノ悪臭
ヲ放ツニ当ツテマラリヤノ流行盛ナリ。又往年ハ传染病
少ナカリシモ、明治十九年虎列刺病ノ流行猖獗ヲ極メ、
其當時ニハ患者百以内ニ対シ死者殆ント八十名（此比例
ニ拠ル時ハ病症ハ最悪症ナリシカ如シ）ニ達セシ如キ慘
状ヲ呈シ、其結果トシテ明治廿一年ニ至ルモ尚インフル
エンザ病ノ患者多カリシヨリ見ルモ、病症ハ实ニ猛悪
ナリシナラン。

下水排出

余ハ出発ノ前、当市下水排出ノ状況ニ付視察ノ命ヲ受ケ
サリシモ、余ハ専門上上水視察ト共ニ右検分ヲ為セシニ
依リ、該件ニ付左ニ數項ヲ記スルモ取テ冗言ニ非サルヘ
シ。

現今下水排出ノ方法ハ本邦普通ノ方法ナリ。其方法タル、
普通ノ溝上ニ板或ハ石ヲ以テ不完全ナル覆ヲ為セシモノ
ニシテ、該溝ニハ殆ト勾配ナシ。去レハ下水ハ地中ニ浸
入シ、同時ニ溝中種々ノ沈澱物ヲ残スモノナリ。

夫レハ市内在來ノ

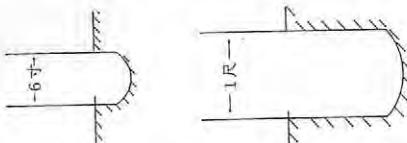
各下水ヲ改造シ適度ノ勾配ヲ付シ、該下水ハ隨時市中ヲ
横断セル附近ノ水路ニ排出スルニアリ。而テ右ノ如クセ
ハ該水路中ノ水ハ多少腐害スルノ恐アリト雖、該水路ハ
平常適度ノ速力ヲ以テ流通セルニ依リ、人身ニ害ヲ及
スヘキ恐ハ更ニナキモノナリ。

余ハ工学士濱野彌四郎ト共ニシンカボル市ヲ視察セシ
結果ニ依リ、前記ノ如ク本邦在來ノ下水ノ構造ヲ維持シ
多少改造ヲ加フルヲ以テ下水ノ改良ヲ完フシ得ヘキヲ信
ス。今同市ニ於ケル下水排出ノ方法ハ、本邦在來ノ下水
ト殆ト同様ナレトモ、只左記ノ点ニ於テ多少ノ差異アリ。

(1) 下水ハ煉瓦、石材或ハ混擬土（セメントヲ以テ造
リ上ケタル）ヲ作り、其底部ハ卵形下水管ノ底部
ノ如ク円形ナリ

(2) 水準ハ特ニ正確ノ計算ヲ施シ、適度ノ勾配ヲ付セ
ンカ為メ、下水ノ始ハ成ルヘク路面ヲ近クシ終ル
ニ至ルニ隨ヒ漸次溝深ヲ増加シタルモノナリ。

左ノ図ハ右ノ構造ヲ明ニセシモノナリ。



台灣總督府ハ余ノ意見ニ拠リ、目下台北ニ於テ學理上有
効ナル断面ヲ有シ且確実ナル構造ニ係ル無蓋下水ヲ築造
中ナリ。依テ松江市ニテハ右台北下水ノ結果如何ヲ確
ム迄ハ、下水ニ對シテハ依然手ヲ下サル様余ノ切望ス
ル所ナリ。

右之通

明治三十二年四月一日

東京

ダブリュー・ケイ・バルトン

附言

工事施行ノ場合ニハ余ハ此處ニ記載セシ外、尚種々
ノ注意ヲ与ヘント欲スルモノナリ

【仮説：復命書提出の遅延理由】

復命本文が1年もの間、提出されなかつた理由は、私の仮説だが、次の4点である。

(第1点) 明治31年(1898年)前半は、バルトンにとって超多忙な時期であったこと。

児玉源太郎が同年2月26日第4代総督に、親友・後藤新平が3月2日付けで民政局長に就任。バルトンの顧問技師の嘱託契約は3月20日更新され、さらに後藤は6月20日付けで民政長官に昇任した。バルトンは、この時期、復命書どころではなかつたのだ。

(第2点) バルトンは、台北市の水道水源地踏査の過程で悪質な風土病に罹り、生死の境をさ迷つたこと。『ジャパン・ウイークリー・メール』は、「同時期に同じ風土病に罹患して入院した患者12名の内、生還できたのはバルトン唯一人」と伝えている。

(第3点) 母キャサリンが同年11月29日この世を去つたこと。バルトンは、12月半ば、国際電信で母の死を知つた。年明け早々、妹メアリー・ローズが「11月29日母逝去」を急報して來た。義兄は、「バルトン家の長男の義務を果たして欲しい」と手紙を寄こした。だが、バルトンは、明治32年(1899年)初め、またまたアーバ赤痢に罹つた。

(第4点) 復命書は、英文で書かれていた。翻訳者は、手続き上、訳文の了解をバルトンから得る必要があつただろう。翻訳者は、松江で行動を共にした門下生の高橋辰次郎であろう。高橋は日本国内、バルトンは当然台北。しかもバルトンは、次々と不幸に見舞われた。高橋は、師バルトンの健康を考え、無理をさせられないという気持ちだったに違ひない。

バルトンにとって明治31年(1898年)という年は、最悪の年だった。だが、翌年は好転したかに見えた。明治32年(1899年)4月19日台湾下水規則(法律第6号)が制定され、台湾の衛生制度が固まつた。後藤長官は、バルトンに60日間の長期休暇を許可した。そこで、バルトンは、家族と共に母国に一時帰国するため基隆港を後に一旦東京に戻ることになつた。5月10日の事である。復命書は、この頃、提出可能となつたが、またしても不幸がバルトンを襲つた。赤痢が再発、医科大学病院に緊急入院したが、遂に帰らぬ人となつた。

復命書の月日が空白になつてゐる理由は、バルトン逝去の爲ではないだろうか。仮にそうだとすれば、復命書は、バルトンが遺した最後の作品になるのではないだろうか。幸いにも復命書は、松江市当局者に渡り、大切に保存されたため私達は復命書を読むことが出来る。

高橋は、師バルトンの逝去の報に接し「師の仕事を引き継がねばならない」と決意し、総督府への転出を申し出たと言う。師弟の絆は、強いものであった。

もう一人、同じ思いの門下生が居た。大藤高彦である。バルトンは、明治28年の夏、松江の踏査の後、京都市下水道計画調査を行つた。大藤は、この調査を引き継ぎ、明治32年3月下水道計画を提出した。計画書には、バルトンが拘つた下水溝底の汚濁物沈殿問題が取り上げられている。二人の間には情報交流が続いていた可能性がある。大藤の計画は、「幻の計画」に終わったが、バルトンの後任教授・中島銳治がリードしたその後の上下水道計画とは考え方が異なつてゐる。今や、時代の転換期である。再評価が望まれる。 (以上)

〈参考〉

『復命書』の謎!? 一表紙は明治32年(1899)・日付なし・松江市水道部、

後半部のパルトン署名は東京・明治31年(1898)4月2日—

『復命書』は冒頭が松江市長への事前調査の概要報告(明治28年6月25日付)、残りの大部分が内務大臣への衛生と改良方法に関する技術的内容となっている。後半部の署名は、「明治三十一年四月二日 東京ダブリュー・ケイ・パルトン」とある。パルトンは台湾の第二期水源調査に出発する直前に、東京でまとめた。日本・台湾を行き来するパルトンの動向がつかめなくて、松江市は『復命書』の表紙の日付を、明治32年(1899)としたものと思われる。それはパルトン死去の前年であった。海外視察(1896-97)の成果を取り入れ、松江の下水排水方法について、具体的に提案していることに注目したい。パルトンによる最先端の下水技術の情報提供、指導を受けながら、松江における下水道工事・改良案は、上水道が完成(1918)した後、完全に忘れられた。下水排除が第一!市民の義務!!というパルトンの精神こそ、松江市は継承すべきであったと強く感じている。

(岡崎秀紀「W.K.パルトンが計画した松江市と台湾の下水整備」、67頁、
「松江市における衛生思想の歴史と今」より)



パルトン

高橋辰次郎

第1節 大藤の幻の計画

バルトンは、明治28年(1896年)8月の初め、松江市の調査を終えた後、京都府技師・谷井鋼三郎と共に京都市下水道計画を策定するため市域一帯を踏査。谷井もバルトンの門下生。谷井は、明治30年11月『京都市下水工事ノ起工ヲ必要トスル意見』を提出した。踏査を行ってから、およそ2年の歳月が流れていた。バルトンは、この間、台湾のために懸命に活動。門下の大藤は、師に代わって京都市下水道計画の策定に取り組みたいと考えるようになっていた。

大藤は、明治32年(1899年)3月末『京都市下水道改良計画ニ付報告』を、さらに2カ月後の5月『京都市給水方法及其計画ニ付報告』を矢継ぎ早に提出。ドイツ留学直前であった師バルトンは、3カ月後この世を去った。大藤とバルトンとは、目に見えない糸で結ばれていたようだ。大藤は、留学から帰国して2年後、京大総長推薦で博士号を得た。推薦理由は、「上下水道並ニ都市計画特に構造強弱學」であった。

大藤の『京都市下水道改良計画ニ付報告』書は、下水道工学の専門書には全く出て来ない。私は、偶然『近代都市環境研究資料叢書3 近代都市の衛生環境(京都偏)』(近現代資料刊行会、2011年)全37巻中の第31巻『上下水道①』に収録されていた『京都市下水道改良計画ニ付報告』全文を発見。報告に記された計画理念は、中島銳治及びそれ以降の考え方とは相当程度異なる。大藤の計画は、バルトンの首都東京の計画同様、「幻の計画」となった。

第2節 大藤の計画理念

彼の計画理念は、現代の私達に何を示唆しているのだろうか。重要ポイントを抽出し、項目毎にその意味を考え、計画理念を明らかにしたい。

[ポイント1] 「公衆衛生工事トハ上水ノ供給並ニ下水排除ノ完全ナル工事ノ謂ニシテ(略)
二者中何レヲ先ニスヘキヤ(略)今試ミニ单ニ工事上ヨリ見ヲ起シテ之ヲ論スルトキハ下水道改良ヲ以テ先ツ着手スルノ便且利アルニ若カサルナリ」

(説明) 上水道は、水を圧送する。下水道は、自然の地勢(勾配)を利用して下水を自然流下で流す。水路に障害があると、汚濁物が停滞し、清掃が必要になる。技術的には、上水道は下水道より簡単である。下水道は、汚濁物の停滞を避けるため、下水溝の構造が複雑になる。

「上水と下水とどちらを先にするか」と問われると、技術的には下水を先行させるべきである。下水道を先行させると、「井水も幾分改良される」利点がある。(ポイント4~6参照)

下水溝の底に汚濁物が堆積しないよう工夫が凝らされ、下水溝の形状や勾配の確保が重視された。なお、「下水道先行」という意見は、当時の京都の有識者共通の見解だった。

(原則1) 技術の限界を知り、短所の克服にチャレンジすること。上下水道のメリット、デイメリットの総合的評価を重要→現実的判断

[ポイント2] 「本市ノ如ク遠ク海岸ヲ離レ下流ニ都市ヲ有スル所ニアリテ合流法ヲ採用スルコトハタダニ事情ノ許サザルノミナラズ、地勢上合流法ヲ採用スルモ敢エテ益スル所ナキヲ信ス。況ヤ汚水処理ノ方法ニ於テ分離法ノ大ニ勝レル所アルニ於テヲヤ」

(説明) 大藤は、鳥の眼で流域を見た(鳥瞰)。京都は、淀川中流域に位置し、下流の大阪に与える影響を考え、「合流式」の採用を無益と断定する。大藤の断言は、まことに明快。京都の淀川下流域の水質保全に及ぼす影響、そしてその役割を深く理解していた。ここで、分流式が汚水処理に優れた効力を持つことが書かれている。特に下水処理は、現行下水道法に規定する「放流」より広範な意味を含意していることを付言しておく。(ポイント3、7 参照)

(原則2) 流域運命共同体。上流側は、下流側に悪影響を与えないこと。→流域思考

[ポイント3] 「歐米ニ於イテハ汚水中ニ糞尿ヲ放流スルヲ例トスルモ本邦ニ於テハ糞尿ヲ最良肥料トシテ処分セラレ(略)放流スルノ習慣ナシ(略)後世各戸悉ク之ヲ汚水中ニ放流スルノ時機到来スルモ妨ケナカラシメンカ為メ、汚水溝ノ断面積ハ充分余裕ヲ存シ置ケリ」

(説明) 糞尿は、日常生活の鏡。合成食品常用者のそれは化学物質を、病者のそれは病原菌を含む。衛生対策として糞尿の収集方式は、極めて重要。糞尿収集は、水運式でなく、糞尿をそのまま収集した方が合理的。(肥桶一荷車)方式が衛生対策としては、理に適っていた。水運式は、快適性・速効性・利便性が高いが、重大な欠点を持つ。大藤時代の下水は、生活雑排水主体。大藤が将来を見越して下水溝の断面に余裕をもたせたことは、先見性が高いようと思えるものの、衛生理念としては徹底性を欠くものと思える。

猪子止才之助(京都帝大医科大学教授)は、明治32年7月『京都市上下水道工事ニ對スル衛生上ノ意見報告』を提出し、ロンドンの技師長バザルゲットの「大遮集幹線による下水道システム」を批判した。ロンドンでは水洗トイレを通して市中の糞尿が大遮集幹線管渠に投入され、遠く海洋に放流される計画であった。だが、その目的は容易に達成されなかった。猪子止は、報告の中でバザルゲットを厳しく批判した。

京都では既に西欧型なら何でも礼讃する風潮は無かった。明治維新から30数年、冷静な批判精神が育っていた。注意を要する点は、大藤の師バルトンが10年余り前策定した首都東京の下水道計画に於いてはバザルゲット方式が採用されていない事実である。大藤は、師バルトンの首都の下水道計画に学んでいたのであろう。ただ、将来を見越し管渠断面に余裕を持たせた。敢えて大藤を擁護すれば、彼は糞尿の水運式収集方式の是非を将来に委ねたのであろう。私は、現在でもこの問題は、解決されていないと考えている。水運式以外に空送式を始めその他の方式も考えられ、様々なメリットが想定できるからである。

(原則 3) 生活雑排水主体の分流式採用の勇気を持つこと→糞尿合併処理は将来の課題

[ポイント 4] 「最大雨量ヲ一時間ノ雨量ニ改算シ其ノ百分ノ六十ハ雨水溝ニ放流セラルルモノト仮定シ、残余ノ百分ノ四十中小部分ハ蒸発シ大部分ハ地中ニ侵入スルモノトセリ(略)下水改良後井水ノ欠乏センコトヲ杞憂スル論者アリト雖モ(略)欠乏ニ苦シムカ如キコトハ決シテ之ナキヲ信スルナリ」

(説明) 大藤は、降雨を雨水溝で流す部分と大地に浸透させる部分に分ける。浸透部分は、井水の欠乏を防ぐための地下水涵養に当てられる。つまり、浸透が明確に計画下に置かれている。現行下水道法は、雨水を「排除」の対象とし、「浸透、滞留、貯留」を無視している。

一例をあげれば、合理式に拠る雨水流出計算法では、仮に流出係数を屋根面や路面のような不浸透面では 1、庭や芝地のような浸透面では 0.5 とすれば、不浸透面と浸透面の面積割合が 1 対 1 の場合、総括流出係数は 0.75 となるとして最大雨水流出量を計算する。

この計算では、地表面での「最大雨水流出」量が問題で、流出外即ち「浸透など」は視野にない。井戸が枯れようが、湧水が無くなろうが、関係がないのである。現行下水道法上は適法だが、水景観も水循環の健全化も、どうでも良いのである。目的を「排除」のみでなく、水景観や水循環健全化を含めれば、流出計算法はもち論のこと計画内容は根本的に変わる。例えば、「春の小川の再生」のような水景観保全を目的とすれば、計画内容、例えば不浸透面と浸透面の面積割合、浸透型施設整備、浸透地と土質改善、緑地整備、修景型整備など計画内容は、根本的に変わる。こう考えると下水道整備が都市の無味乾燥化、ヒートアイランド現象に大きな役割を果たしたと言えるだろう。私達は、今や大転換の時代におり、既に遅きに失している。私は、50 数年前、都市域の雨水流出計算法を研究したが、何の疑問も持たず“地表面流出”のみを対象としていた。今、当時の己の視野の狭さを恥じるものだ。

(原則 4) 計画は、「降雨」を原点に、水循環の健全化を→排除だけでなく、総合的視野で！

[ポイント 5] 「雨水溝及污水溝ノ形状及構造ハ途中ニテ固形物ヲ沈殿シ又ハ污水ヲ漏洩スルコト無カラシメ且疎通円滑ニシテ而カモ勾配ノ急ナル流速ノ大ナル所ト雖モ水路表面ノ磨剥セサルヲ必要トス(略)少量ノ流水ニテモ適當ノ流速ヲ保チ沈殿物ナカラシメン為メ底部ハ之ヲ円形トセリ」

(説明) 汚濁物の下水溝底での沈殿堆積防止に全知全能が傾けていると言える。有機性汚濁物は、徐々に腐敗し、液化し、気化する。かくして、地下水を汚染し、気圧に漏洩して大気を汚染する。沈殿堆積物が水圏、気圧、土圏を汚染する元凶となるわけである。

バルトンが松江市の下水排水に関して強調した下水溝底の沈殿物防止に関する問題と基本的に同じ内容。バルトンと大藤との間に何らかの情報交換があったのではないかと想像させるものがある。(報告提出月日が明治 32 年 3 月と言う点も不思議に思える。)

例えば、本年2月に勃発した埼玉県八潮市の陥没事故の主因は、下水道ということだが、大藤の計画理念が徹底しておれば、事故そのものが起らなかつた可能性が高い。

(原則5) 汚濁物の沈殿堆積を防ぐこと→汚濁物の腐敗・ガス化に注視

[ポイント6] 「汚水溝ニアリテハ通風ノ宜シキヲ得セシムルヲ期セリ」

(説明) 大藤が暗渠の換気通風に注意を払っていることに驚かされる。汚水の大部分が生活雑排水であるにも拘らず、である。大藤は、次のように汚濁物の気化の恐ろしさを強調している。「一丁内凡三カ所ノ予定ヲ以テ通風管ヲ高ク屋上ニ架設シ、輕浮ノ臭氣ハ之ヨリ高ク飛散シ(略)新鮮ノ空気侵入シテ溝内ヲ流通スヘキ」

「人命の尊重」が重視されているはずの現代に於いて、大藤のこのようない認識は、どこに行ってしまったのだろうか。「人命の尊重」は、「衛生工学」と言う学問分野においては単なる建前であつてはならない。

(原則6) 暗渠においては溝渠の換気通風に配慮すること→汚濁物の腐敗・ガス化に注視

[ポイント7] 「コノ計画ニ採用スル汚水処分法ハ此ノ灌漑濾過二法ノ混用ヲ取レリ即チ市外各幹線放流口ニ對シ適當ナル箇所ニ(略)濾過池ヲ設ケ汚水ノ灌漑ヲ要セサル時期ニアリテハ此ノ池ニ由テ汚水ヲ清浄ニシ夏時耕作時ニハ一般田野ニ從前ノ如ク灌漑セシムル計画ナレバ決シテ市街田野灌漑用水欠乏ノ憂イナク洵ニ一挙両得ノ策タルヲ信スルナリ」

(説明) 汚水の浄化は、再利用のための浄化と水域の水質保全(自然生態学的利用)のための浄化の両様がある。大藤は、利用の時期と利用量を組合せて両様の浄化方式を導入している。現行下水道法は、浄化後の水は単に「放流」と規定するのみである。つまり、後者の浄化なのである。だが、大藤の理念は、総合的な利用の視点に貫かれている。

ここで思い出すのが広島の牡蠣養殖に関して、「下水高度処理が牡蠣に必要な養分を除去している。処理水準を引き下げるべきだ」という水産関係者からの意見があつたと聞く。計画は、利用と保全の両立の上に成立する。

(原則7) 汚水の浄化は、再利用をも前提とすること→単なる放流でなく、利用を含む意識を!

第3節 大転換の時代に

埼玉県八潮市の陥没事故の発生、災害時のマンホールトイレという衛生上問題のある発想、非常時対策の無策等を思う時、およそ130年余り前の大藤の基本原則と現実との乖離の大きさを痛感する。両者を隔てる130年の歳月の間に、私達は「快適性や利便性を一刻も早く我がものとしたい」という欲望剥き出しの方向に後退したのだろうか。

今こそ原点に回帰し、大藤の計画理念と中島以前の学統を再評価し、水循環の健全性持続の視点から「恒常性」を担保する施設整備を進める転換の時代である。 (以上)

京都市下水道改良計畫ニ付報告

總論

嘗テ山紫水明ノ樂士ヲ以テ天下ニ誇リ世人亦之ヲ首肯セシ京都市モ
究々理學ノ進歩久シク其美名ヲ擅ニスルヲ許サス化學的精查ハ市
内井水ノ大半不良ヲ示シ衛生上ノ統計ハ必スシモ健康地タルヲ
保セサル等皆上下水改良ノ實施ヲ促サルハナク爲メニ本員等之カ
調査ヲ嘱托セラレ茲ニ先ツ下水改良計畫ノ梗概ヲ報告スルニ至レル
ハ深ク本員等ノ榮トスル所ナリ

抑モ公事

事ノ謂

大藤高彦 おおふじたかひこ 構造力学

1867.11.24～1943.12.7。京都府に生まれ
る。1894(明治27)年、帝國大學工科大學土
木工学科卒。96年、第三高等学校教授。97
年、京都帝國大學理工科大學助教授。99年、
土木工學研究のためドイツへ留学する。



1901年にアメリカへ転学し、同年に帰国し、
教授となる。1914(大正3)年、京都帝國大學
工科大學學長。19年の官制改正により京都
帝國大學教授、工學部で構造強弱學講座を
担当した。

キ 互物價ニ高低ナキ以上ハ著シキ増減ナキコトヲ信スルナリ

明治三十二年三月三十一日

臨時土木調査委員

工學博士 一見鏡三郎

臨時土木調査委員

工學士 大藤高彦

2024 展示会「松江市における衛生思想の歴史と今」と 『図録』刊行について

松江バルトン会 岡崎 秀紀

はじめに

本稿では、2024年10月に「松江市における衛生思想の歴史と今」のテーマで開催した、特別企画展および『図録』刊行について、講演内容をベースに加筆して報告させていただきます。各詳細につきましては、『講演資料集』、配布チラシをご参照願います。

1. バルトン集合写真

はじめにご覧いただきたいのは、W.K.バルトンは明治28年（1895）7月に松江市水道水源の調査で来松しましたが、その時の集合写真です。中央がバルトンで、右が高橋辰次郎、左が関屋忠正です。前列左端は福岡世徳市長で、後列には松江市の医師が並んでいます。最後列中央が、松江市衛生思想普及の先駆者、田野俊貞です。この写真は、日付の確認が取れませんが、私立衛生会島根支会第十二次懇親会があり、バルトンが衛生講演をおこなった明治28年7月29日のことと思われます。国内最後の水源調査地となった松江で、バルトンの鮮明な写真が残っているのは貴重だと思います。



2. 衛生思想展示会

期間 2024.10.1～11.3
会場 島根大学附属図書館
テーマ 衛生の歴史(普及と実現)と
4人の先人の業績

A.ローレツ(1864-1884) 奥国出身、“衛生思想の祖”・ドイツ医学教授

1874 来日、76年より愛知県公立医学校でドイツ医学・衛生学を教授。

田野俊貞(1855-1910) “衛生思想普及の先駆者”

ローレツに学ぶ。後藤とは終生の友。衛生思想の普及(愛知・島根)に尽力。

後藤新平(1857-1929) “衛生国家の推進者”

ローレツに学ぶ。衛生局長、台湾民政長官、東京市長など政治行政分野で活躍する。

W.K.バルトン(1856-1899) 蘇国出身、“衛生工学の祖”“上下水道の父”。

1887 年来日。工科大学衛生工学教授、内務省技師。全国・台湾の水道設計に従事。



3. 展示のポイント

今回の展示会の意義として、まず第一に松江で初めて衛生思想の普及と実現の歴史を4人の先人を通して、市民に提示できたことです。彼らは全員、松江と繋がる人物でありました。ローレツに学んだ田野俊貞、田野の終生の盟友として国内・国際で活動した後藤新平、後藤はバルトンを台湾に招聘しました。松江が、衛生思想の普及と実現の点で、日本の大きな歴史の流れの中心

にあることが明確になったと考えます。

ローレツおよび田野の略年譜を初めて展示できたこと、ドイツ語が堪能であった田野が所蔵した、最先端のドイツ語の医学書 10 点を初めて公開したこと、4 人の先人に繋がる、初代衛生局長・長与専斎の業績を冒頭で取り上げたこと、バルトン

の衛生調査、全国 29ヶ所および台湾 14ヶ所の位置を、各地図上にプロットしたことなども、展示会のポイントであったと考えます。

展示のポイント

衛生思想普及と実現の流れを、
ローレツから田野・後藤・バルトンを通して解説した。

- 田野と後藤が、国家衛生と自治衛生の両輪で、衛生の道を推進した。
- 長与専斎の業績（衛生の概念、個人から社会への拡大）を解説した。
- 田野所蔵の最先端のドイツ語の医学書（計10点）を初公開した。
- バルトンの衛生調査を日本、台湾地図上にプロットした。



A.ローレツ “衛生思想の祖” “ドイツ医学の教授”
田野俊貞 “衛生思想普及の先駆者”
後藤新平 “衛生國家の推進者”
W.K.バルトン “衛生工学の祖” “上下水道の父”
長与専斎 “医療・衛生制度の父”

4. 展示からの新知見

(1) 衛生学と衛生思想のルーツ

それは、明治 9 年(1876)より愛知県公立医学校でドイツ医学を教授した A.ローレツでした。彼に学んだ、田野俊貞、後藤新平が、衛生学から公衆衛生（社会全体の健康を守る）へと進展させました。二人が学んだ時期は、世界史的に見ても早く、日本では初めてのことでした。展示を通して、彼らが現代の予防医学の基礎を築いたことが理解できると思います。

(2) バルトンと下水道

バルトンは水道、特に上水道の衛生工学者であったと理解されがちです。しかし、どうしてどうして、上水道のみではありませんでした。バルトンは、来日前のロンドン時代（1878 年以降）から現場で技術修行を重ね、大規模建築では、給排水工事の計画に携わっていました。

私は、バルトンが上水道よりも下水道への関心が高く、最初の技術修行や課題の取り組みは下水道が早かったのではという印象を持っていました。バルトンの来日は、明治 20 年（1887）5 月ですが、その直後の 7 月には函館へ後藤が同行して衛生調査に出かけます。当地の演説で、「函館では排水法に問題がある」と指摘した上で、「欧米では排水法の改良で伝染病が激減した」、「下水からの蒸発、汚泥が人身を害する」と強調しています。下水の整備が健康の改善に貢献するということです。

(3) 松江水源調査（明治 28 年・1895）と『復命書』（明治 32 年・1899）

先ほど稻場先生より、松江の『復命書』のお話がありました。バルトンが水源調査をしたのは、明治 28 年（1895）で、その際には、冒頭の「集合写真」でお話した衛生講演で、バルトンは「下水改良は松江市民の義務」と述べ、下水を強調しました。それから 4 年を経て、内容、体裁が整って、『復命書』が仕上がります。しかし、表紙には、「明治 32 年」とだけ書いてあって、月日が抜けていました。

注目したいのは、『復命書』の「下水排出」

バルトン記念碑 2006年建立 (松江市本郷)

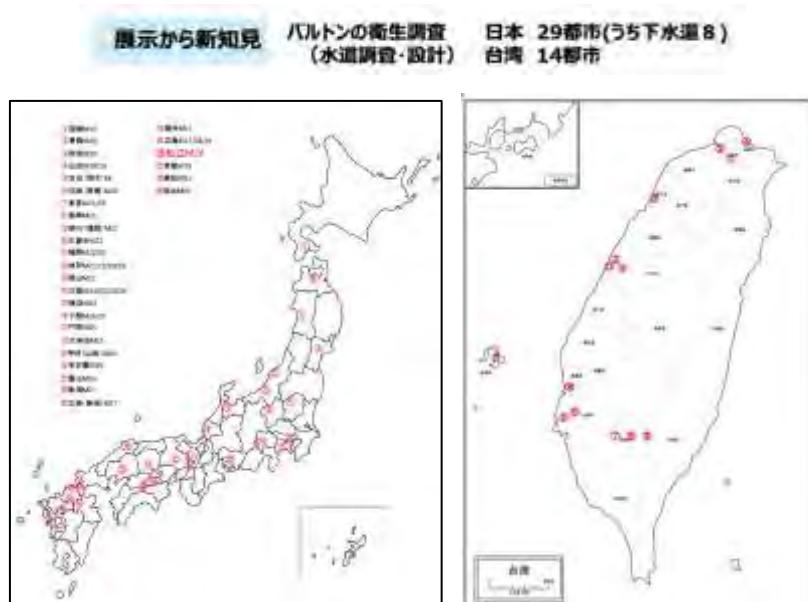


(PP. 30-35) の項です。バルトンは浜野弥四郎とともに、下水技術の最新情報を入手する目的で、横浜港発着で明治 29 年(1896)12 月から 3 ヶ月間、シンガポールなどへ海外視察をしました。その結果から、開渠式で底部の卵型下水管、適度な勾配、レンガ・石材・混泥土の使用などを取り入れた、従来構造の改良型を提案して、それを『復命書』に記載しました。末尾には、「明治三十一年四月二日 東京ダブリュー・ケイ・バルトン」と記した署名が書かれました。

バルトンは海外視察のあと、明治 30 年(1897)3 月、再び台湾に赴き、基隆、台湾南部地区の水道調査などを行ない、同年 9 月に日本に戻っています。そして翌明治 31 年(1898)の 1 月から 2 月にかけ、四国の衛生調査に出かけます。2 月上旬帰京して、『復命書』に目を通し、署名(4 月 2 日)したのです。このあと、バルトンは家族とともに、台湾(4 月 10 日神戸港発、14 日基隆着)に向かったのです。

台湾に戻ったバルトンは、第二期水道工事の水源調査で、明治 31 年(1898)から、新店溪はじめ葫蘆墩・梧棲(台中市)の各地を精力的に歩き回りました。この間、不幸にも、風土病に罹りました。体調は万全ではありませんでしたが、翌明治 32 年(1899)には長期休暇を得て帰国することにし、東京に向かいます(5 月 10 日基隆発)。しかし、赤痢を再発し、東京の入院先で 8 月 5 日に急逝しました。『復命書』は台湾での第二期水道工事に従事する直前に東京で最終的にまとめたのです。バルトンの逝去の前年であり、いわばバルトンの遺言がありました。

バルトンは『復命書』の下水排出の項で、海外の最新の下水道技術の情報を取り入れ、具体的に提案し、また注意喚起しました。来松直後の衛生講演(1895)では、「下水改良は市民の義務」と強調しています。松江市は、この提言を活かすことができませんでした。財源を理由に上水道水源確保のみの対応で進みました。下水道のことは、上水道が完成(大正 7 年・1918)したのち、完全に忘れられました。バルトンの精神こそ、松江市は継承すべきであったと考えています。



(4) 長与専斎と松江

初代内務省衛生局長・長与専斎については、展示会では衛生の概念を、個人から社会へと拡大した業績に触れました。

展示では取り上げることができませんでしたが、長与は松江と大いに関係がある人物でした。田野家には、長与の扁額が残されていました。明治 23 年(1890)、長与は視察で松江市を訪れ、田野俊貞と交流しています。その時の松香(専斎の号)書の扁額「物我同春」(田野家蔵)、「山村老秋」(松江市医師会保存)があります。また、明治 27 年(1894)10 月に来松した長与は、大日本私

立衛生会島根支会で、「松江の衛生（湖水、上水・下水）、コレラ病の流行、水道布設は要」などの内容で演説しています（この項、田野俊平の調査に依る）。この時期、衛生会島根支会が「水道敷設建議書」（明治26年・1893）を提出するなど、水道建設へ向けて動きが活発となって行きます。明治28年（1895）のバルトン来松（内務省派遣）等との関わりなどに注目しなくてはなりません。

日本の衛生行政の基礎を築いた長与専斎、続く4人の先人が築いた公衆衛生普及と実現の歴史を、松江を取り込んで説明できることは興味深いことです。これについては、いずれ別の機会で松江バルトン会から報告したいと考えています。

5. 成果と課題

（1）衛生思想の普及と実現を、世界と日本における衛生思想の動きと絡めて、4人の先人の業績を紹介しつつ説明できた。

（2）松江市民に衛生の考え方を起点にして、先人が取り組んだ上水道整備の歴史を知ってもらうことができた。地域で初の衛生思想展示会となった。

（3）『図録』の刊行も、この分野、テーマで初めてであった。

（4）A.ローレツ、田野俊貞の略年譜は、研究者の協力を得て、最新の研究成果を取り入れることができ、充実した内容とできた。

（5）今後の課題として、日本、台湾、英国、オーストリアの研究機関や研究者と連携して、バルトンはじめ衛生学、公衆衛生の歴史と現代のテーマで、研究ネットワークができたら素晴らしいと考えます。



6. 『展示会図録』の刊行（2025.6）

展示会の図録は、原稿が集中できた2025年3月からはじめ、6月に刊行することができました。

出版は、Amazon KDP のペーパーバック本を利用しました。これは非常に優れた画期的なシステムです。PDF原稿が整うと、Amazonの規格に合わせる多少の作業が必要ですが、誰でも簡単にオールカラーで印刷が可能となります。そしてAmazonが販売してくれるのです。出版経費はかかりませんし、在庫の心配もありません。これを使わない手はありません。松江バルトン会は、2023年10月に台北自来水博物館を訪問した記録を『松江バルトン会資料集 第3集』（2024.5）として、Amazonから出版・販売しております。



著者 松江バルトン会
著者名 matsuehygonton@gmail.com
発行日 2025年6月1日
販売金 320円(税込) 342円
出版 アマゾン・Kindle
出版情報・ご購入! [出典情報・ご購入!](https://www.amazon.co.jp/dp/B0B9XHJL9L)



衛生思想の歴史を全国的に捉えて解説した『図録』の刊行は、大きな成果となりました。

目 次	
『初録』刊行にあたって	松江バルトン会会長 田野 俊平 3
挨拶・祝辞 4
第1章 衛生思想の歴史と今 — 明治期の先人たち —	
1-1 衛生の出現と長与專斎	— "Hygiene" 生を衛る — 10
1-2 「予防」から「衛生」へ 11
1-3 日本における衛生学の始まり — ループは愛知県医学校 — 11
1-4 田野俊貞について、ドイツ人教師からドイツ医学を学んだ田野俊貞、愛知県公立医学校・病院におけるローレツと後藤新平 12
1-5 衛生思想の普及 — ローレツから田野・後藤へ — 14
1-6 ローレツが教えた衛生学、衛生警察、ローレツから衛生思想を学んだ後藤新平と田野俊貞、指定文化財「田野家住宅(旧田野医院)」の保存 15
1-7 人々の健康と幸福のために 18
1-8 松江市へもたらされた近代医学と衛生思想、医師後藤新平の活躍 19
1-9 俊貞が著した『國家衛生原理』 20
1-10 衛生思想実現へ向けて 21
1-11 W.K.バルトンの紹介(全国調査地図)・松江市におけるバルトンの活動 22
1-12 飲水思源 — ループをより感謝する — 23
1-13 台湾におけるバルトンの活動、飲水思源 24
1-14 松江市水道事業の歴史 25
第2章 写真でたどる先人たちの足跡 — 衛生思想実現への道 —	
2-1 田野俊貞の履歴と愛知県医学校での活躍 28
2-2 岐阜県医学校・松江病院で活躍した田野俊貞 30
2-3 田野家の所蔵する洋書 31
2-4 ローレツが愛知県公立医学校で教えた医学 34
2-5 田野俊貞の生誕の友人後藤新平 36
2-6 バルトンの松江市における水道調査 38
2-7 バルトンの台北における水道調査 41
2-8 田野俊貞、後藤新平、ローレツ、バルトンの関連図書 43
2-9 田野俊貞が交流した人々 46
第3章 講演・講話報告	
3-1 衛生の時代到来 — 衛生思想の普及と田野俊貞の活躍	梶谷光弘 48
3-2 松江市の水道のあゆみ	杉谷雄二 53
3-3 都市の医師バルトン先生—松江と京都の足跡から—	稲垣紀久雄 58
3-4 W.K.バルトンの妹 メアリー・ローズ 62
130年の旅をして2024年帰郷!	稲嶋日出子 62
3-5 W.K.バルトンが計画した松江市と台湾の下水整備	関崎秀紀 65
3-6 近代化産業発達としての松江市水道施設と建造物	足立正智 70
第4章 資料	
4-1 略年譜 A.ローレツ・田野俊貞・後藤新平・W.K.バルトン 74
4-2 展示目録 82
4-3 参考文献・展示会概要 86
謝辞	
 91

おわりに

本日（8月5日）、地元紙に『図録』出版の記事が掲載されました。

松江バルトン会・田野俊平会長（田野俊貞氏ご来孫）のコメントが載っていますので、最後にこれをご紹介したく思います。

「今の時代にきれいな水があるのは当たり前だと思っているところがあるが、コロナ禍で私たちは衛生の大しさをかみしめた。衛生思想を広めた先人の業績を振り返る良い機会だ。」



「衛生思想広めた偉人紹介」『山陰中央新報』2025年8月5日付

座談会

バルトン先生が拓いた日台の水インフラに関わる人の『環』

登壇者：謝長廷、稲場紀久雄、八田修一、岡崎秀紀、鄧淑晶、司会 酒井彰

酒井：本日最後のプログラムは、「バルトン先生が拓いた日台の水インフラに関わる人の『環』」と題しまして座談会を行います。登壇者は、すでにご挨拶や講演の際にご紹介させていただいておりますので、ここでは省略させていただきます。進行は、私、NPO 法人日本水循環文化研究協会の酒井が務めさせていただきます。

議論の進め方については、3つのサブテーマを設けております。(1) 先人の功績を顕彰することとは (2) 先人の功績顕彰を継続するうえでの課題 (3) 日台でともに顕彰活動を継続するためのアイデアや決意、という順でご発言をいただきたいと思います。

先人の功績を顕彰するということ

では、謝先生から、先人の功績を継承するということの意味についてお話し願います。
謝：先程、申した通り、台湾人の次の世代、日本人の次の世代に先人の功績を伝えていきたいと思っています。先ほど、岡崎さんがおっしゃったように、生命優先、それと人間の尊重、そういう精神が、今の時代にこそとても必要だと私は思います。伝えることの上位に来る目標、広い意味では、世界平和ということになるのではないか。今、世界はきわめて緊張関係にあり、戦争など悪いニュースばかりです。これは、人命を重視し、人間の尊厳を重視し、インフラを通じて、どういうふうに人々の幸福を増進するのか、こうした問題を重視していきたいと思います。

酒井：ありがとうございます。では、稲場先生お願ひいたします。

稲場：先人の功績を継承するとは、どういうことでしょうか。このテーマを頂いて思ったことは、「継承」の具体的な意味です。5W1Hの中でも“Why”、何故。それと“What”、何のために。この二つが明確でないと「継承」という行為が不自然な形になると思うわけです。「何故、何のために継承するのか」。これが謝先生もおっしゃった「未来の世代に伝えたいという切なる思い」の基本になると思います。

私は、「水守り」を自任する者として、「生命(いのち)の水」を守るために、3つの環を守り広げることが大切だと思っています。

3つの環とは、ひとつは「水の環」です。「水の環」は、当然「水循環の環」です。この水循環の環は、自然の異常な力や人間の欲望で歪められたり切断されたりするのです。

私達は、水の環の歪みを許容範囲に収めなければなりません。人間に例えれば、血液循環ですね。血液循環に於いて、血圧が一定の範囲に収まっていることが大切で、この状態を「恒常性(ホメオスタシス)」と言います。収まっていない場合、高血圧や低血圧になってしまふわけです。流域の水循環に於いても恒常性を保持する努力を傾けなければなりません。このことが「水の環」の課題です。

そのために「文化の環」が必要になるわけです。文化の環とは、言い換えれば「知恵の環」です。人類発祥以来、この文化の環は、様々な努力によって守られて來たのです。

例えば「下水」という言葉ですが、皆さんはこの言葉の語源を考えたことがありますか。下水という言葉は、「下」の「水」です。「下」は、日本の古代語では「ゲ」と濁らず、清音で「ケ」と発音し、「日常」と言う意味です。従って、「下水」は、「ケスイ」と言って、「日常の水」という意味です。ここで「ケ」という言葉は、日本の神道で言う汚れの「穢」に通じます。汚れの「穢」、これが日常ですが、その反対が「晴れ」です。「穢」が「晴れ」になり、「晴れ」が「穢」になる。こうして「循環」するわけです。そのように下水という言葉の語源を見ても、先人は深く考えて言葉を創っているわけです。

「飲水思源」という四字熟語もあります。あるいは「三尺流れれば水清し」という水利用ルール。このルールは、何を意味しているのかというと、「下水は三尺(1メートルほど)流れるうちに清浄になるように、(手元、つまり発生源で)流さなければいけない」というルールです。ということは「流す時には、それなりに汚染物質を取り除いて流しなさい」ということになります。ところが近現代は、「日本は、川の流れが豊富だから、汚れた下水を流しても大丈夫」と解釈をしている人が多くなってしまったのです。利便性、快適性を享受したいと言う欲望の帰結です。恒常性は、欲望によって簡単に破綻するのです。

「知恵の環」を守って行くのは、「人の環」です。人の環が大きく強くなればなるほど水の環は守られます。従って、「水の環」と「文化の環」と「人の環」、これら3つの環がキチッと整合している社会は、水循環の「恒常性(ホメオスタシス)」が守られた健全な人間社会ということになります。こういう人間社会を未来に伝えて行きたい。

私達は、そのお手本になるものを探し、それを目標にして、その目標を高々と掲げ、活動しなければなりません。そのために、「継承」という行為が必要なのだと思います。

酒井：どうもありがとうございます。3つの環のために継承が必要だということをおっしゃっていました。では続きまして、八田さんお願ひいたします。

八田：ありがとうございます。事前に事務局からいろんな質問をされて、今何を答えるべきのか迷っています。先ほども申し上げましたが、祖父の慰靈祭が5月8日に行われます。その時には、台湾の方が何百人も来ていただいて、いまだに継承をしていただいています。祖父が亡くなつて、ちょうど今年で83年になるのですけれども、よく台湾の方から言われたのは、さっき稲場先生がおっしゃられた飲水思源なんです。水を飲む時、その源を思う。どういうことかっていうと井戸です。井戸を掘った人のことを思って、感謝して飲めというようなことだと思っていますけれども、そういう感謝の気持ちがいまだに続いているということだと思います。

先ほども申し上げましたが、2006年に私の父が亡くなりましたが、それまでずっと父親は慰靈祭に出席していたのです。2007年から、遺族の誰も行かないのは失礼だよねと思いまして、それからは私が行くようにしております。今日、バルトン先生のご子孫の方々が参列いただいたことが本当に僕には嬉しかった。また来年もぜひよろしくお願ひいたします

す。ありがとうございます。

酒井：それでは、岡崎さんお願ひします。

岡崎：実は、4月にソウルに行きました。ソウルにも水道博物館と下水道博物館がありまして、そちらを見に行つたのです。ご存知かもしませんが、ソウルの水道は1906年から外国人が始めたのです。それがバルトンのような学者を兼ねたような方じやなくて、2人のアメリカ人、2人とも実業家なのです。要するに、ソウルの水道は公営的な考え方で最初から始まつたんじやなくて、経営的な考え方で、企業家・投資家がソウルにやってきて、それから技術者を巻き込み、技術者も日本から、イギリスから、アメリカから行つていきました。彼らがソウルの水道を造つておりました。それで、その展示ですが、最初のアメリカ人2人の銅像か写真かぐらいはあると思っていたんですけど、それが全然ありません。そこで、どうしてないのかなと思いました。公営的な考え方のもとで、人々の健康を守るとかいうことが、衛生の大眼目であるといったような、そういう大前提で残念ながら動いてなかつたということがあるのかなと思いました。ご承知のとおり台湾は感謝の国民だといつて、謝先生からも以前お話を伺つていましたので、そういう受け止め方が韓国では少ないのでかなと思いました。水道博物館、下水道科学館を訪問して、そういうことを感じました。

酒井：分かりました。そのアメリカ人の性格によるのか、韓国の人々の性格、国民性によるのか、どう思いますか。

岡崎：企業家が最初に入つてきたからだと思います。結果として、清浄な水の供給ができたことは住民にとって素晴らしいだったわけですが…。

酒井：分かりました。ありがとうございます。では、鄧さん、稻場先生の本を台湾に紹介するお役目を果たしてこられて、それもひとつの先人の功績を広く伝えるということになっていると思いますので、どういう意図で、あるいはどういうことを目的に翻訳されたかということなどを含めて、ご発言をお願いします。

鄧：皆さん、こんにちは。鄧です。

実は、稻場先生から本をいただいたのは、2016年、謝大使が赴任したばかりの10月頃でした。その時いっしょにいただいた手紙の中に、「誰か翻訳をしてくれる人はいないか」というような一筆が書いてありました。その時、私は謝大使の秘書をしていて、適当な人選ができるればいいけれど、もしいなければ私やってもいいですよとお答えしました。

それから、4年間、ちょうど私が60歳で定年退職の年を迎えて、私は翻訳を決心しました。どうして引き受けたのかというと、『バルトン先生、明治の日本を駆ける！』の翻訳は、妹と一緒にやつていたのですけれども、なかなか進まなくて、まだ出来上がっていませんでした。しかし、バルトン先生のような人をぜひ台湾の人々に紹介したいなと思っていましたので、それを機に仕事を辞めました。

しかし、辞めたら何とコロナが来ました。ですから、私たちの本のタイトルを「バルトンの物語、台湾・日本の衛生、公共衛生の成功者」というようにしました。コロナという

ものはやっぱり怖いです。ですから、できれば一日も早く多くの人に、特に、台湾の人に衛生の大切さを知ってもらいたいと思って、それでこの本を出版しました。おかげさまで多くの方々から好評を得ました。

その後は台南市から依頼があって、『都市の医師—濱野弥四郎の軌跡』という稻場先生の本を翻訳させていただきました。この本は先ほど八田修一さんからも紹介されましたが、この本の執筆に稻場先生は、何と 40 年ぐらいかかったそうです。ですから、その本を翻訳する価値があると思いました。そして、緒方英樹さんの『台湾の大地を拓いた人たち』は、何とか苦心して 2 年間で翻訳して台湾で出版しました。

こうした台湾の礎づくりに貢献した人たちの本を翻訳して思ったことは、日本人はもとより、やっぱり台湾の人たちにもそうした歴史があることを知って、お互いをよく理解して交流を深めたい、さらに豊かになってもらいたい。そうした仕事を成し遂げた先人たちに敬意を表したいですし、感謝したいと思って、翻訳しました。以上です。(拍手)

酒井：どうもありがとうございます。おそらく台湾の方々はバルトン先生の功績をずっと継承してきたけれど、バルトン先生のお人柄がどのような方なのかということについては、おそらくこの本で多くの方に伝えられ、それによって、またバルトンさんへの尊敬の念も高まったのではないかと思います。

皆さまのお話を要約するわけではないのですけれども、最初に謝前大使がおっしゃったように、これから目指す社会を多くの人に認識しもらうためには、先人の功績を伝えるということはひとつの有効な手段ではないかというふうに思います。先人の功績を継承することが、社会を構成する人々の意識や行動の変化、そういうしたものにつながれば、ということなのかなと思います。

どうもご協力ありがとうございます。次のテーマは、先人の功績継承を継続する上の課題、これも皆さんのが最初の発言に含まれているかもしれません。ところで、明日は広島に原爆が投下された日です。昨晚のテレビ番組でも、これから被爆体験をどう次の世代に伝えていくかということが大きな課題だということが取り上げられていました。では、こういうことが一番の課題だということを一言ずつおっしゃっていただけますでしょうか。では、先ほどと同じ順番でお願いします。まず、謝先生から。

先人の功績顕彰を継続するうえでの課題

謝 先ほど、稻場先生がおっしゃったとおり、水は命です。水はとても大事です。水に対する貢献、とくに台湾においては、水は飲用水、かんがい用水に必要です。

たとえば、八田與一さんが大規模なかんがいをおこなった嘉南大圳事業。あとはバルトン先生と教え子の濱野弥四郎さんが貢献された台湾の水道建設、旧制四校、東京帝大で八田與一技師の先輩にあたる鳥居信平さんが建設された地下ダム「二峰圳」、八田與一技師の後輩にあたる磯田謙雄さんが設計した農業用水路「白冷圳」など大きな貢献があります。

ただ、ひとつの問題があります。バルトンさんは日本にも台湾にも多大な功績を残され

ました。しかし、濱野さん、あまり日本では功績がなかったようです。許文龍さんが3つの銅像を作り、そのひとつを、濱野さんのふるさと千葉県佐倉市に寄付しました。佐倉市は、それを受けとて「この人、誰か分からぬ」と言ったそうです。台湾では偉大な濱野さんですが、ふるさとに対して貢献がなかったため、その功績が理解されていなかつたのだと思います。結局、その銅像は、岩手県の後藤新平記念館に寄付されました。

ですから、われわれは、誰に伝えるか。やっぱり日本の方にも伝えなければなりません。八田與一さんにも、最初はそういう問題がありました。金沢市のふるさと偉人館に八田與一が入っていないくて、元首相の森さんも、最初は八田與一さんが誰か知らなかった。

今、台湾の観光客がたくさん日本に来てあらゆる方面に注目しています。そこで我々は、日本には台湾に大きな貢献をした人たちがたくさんいらっしゃるということを日本人にも伝えたいと願っています。

われわれの使命は、人類の資産を、遺産を継承することです。だから、人類共通の遺産。バルトンさんや八田與一さんが残してきたものは人類共通の思想、人類共通の資産、我々にはそれを継承する使命があります。人類の遺産を継承して、次の世代まで伝えることは、われわれの使命だと考えます。ありがとうございます。(拍手)

酒井：ありがとうございます。今の濱野さんのお話は、まさにスコットランドでバルトンの功績が全く伝わっていなかったということにも共通すると思いました。では、稻場先生、お願ひします。

稻場：難しいテーマなので、私もいろいろ考えました。そこで謝先生のお話の中で出された許文龍さんことを少し話したいと思います。許文龍さんには『台湾の歴史』という興味深い名著があります。この本の中で書かれていることを紹介する前に、許文龍さんは1996年から4年間、故李登輝総統の政策顧問を勤められました。その切っ掛けは、李総統が『台湾の歴史』という小さな本(縦15センチ、横10センチ、厚さ7ミリ、総頁数140頁)を「非常に優れた本だ」と評価されたことだったのです。

許文龍さんは、『台湾の歴史』の最初に、およそ次のように書かれています。

“国家の版図がいかに大きく、民族が強大であっても、人民は必ずしも幸福であるとは限らない。私の歴史観は、まず庶民から見た歴史を重視します。”

こうキッパリ言い切っておられます。許文龍さんは、日本で言う武士道を超えた「人間道」とでも言うべきものをお考えになっている。そして、同時に一つの中国論を超えておられる。私は、このように思います。李登輝総統は、こう言う許文龍さんに対して「わが意を得たり」と、『台湾の歴史』という小さな本に敬意を表された。

素晴らしい真の人との出会いですね。許さんは、人々の幸福の享受こそが全てだと。これは、ある意味で謝先生がさっきおっしゃった「善の循環」と重なるお考えだと思います。だから、謝先生も、李登輝さんも、許文龍さんも誠の同志なのですね。

素晴らしい人物に出会うことは、また愉快なことです。人の人生は、こういう人との出会いによって豊かに彩られるものです。

許文龍さんは、皆さんご承知のように奇美実業の創業者で、台湾の松下幸之助と言われる名経営者でした。残念ながら一昨年（2023年）11月に95歳で亡くなられ、盟友の李登輝さんも、その3年前の2020年に97歳で亡くなられました。お二人とも天寿を全うされたのです。私は、お二人の生涯を心から祝福し、その志を受け止めたいと思います。

許さんは、日経アジア賞受賞の挨拶の中で、ご自分の経営の基本的な考え方を語られています。考え方は、次の3点です。一つ目は、「企業経営は、幸せを追求する手段」ということ。二つ目は、「財団法人奇美文化基金会を設立し、事業収益の約10%を社会事業に寄贈する」ということ。皆さん、台南市に行かれたら分かりますよ。実に素晴らしい博物館があります。私の記憶では、有名なバイオリンの名器ストラディバリウスが50挺位ある。すごいですよ。1挺でも数億円ですから。それを台湾の音楽家に貸し出して、演奏をしてもらう・・・。許文龍さんは、音楽愛好者で、ご自身もバイオリンを弾かれます。

三つ目、この三つ目が非常に重要です。というのは、「従業員に無利息の資金を貸し出して自社株を保有させる」というのです。その結果、許文龍さんの会社では、従業員の定年退職後の生活は保障されている。要するに、定年後も、会社の株の配当金が入って来るわけですから、生活に何の心配もないと。こういう風になっているわけですよ。

私は、許文龍さんの経営を「幸せの経営システム」と名付けたいと思います。許さんは、それこそ生涯をかけて「幸せの経営システム」を実現された。日本もこれ位にならなければと思います。経営的に学ぶべき点がもの凄くあるわけです。

私は、そういう意味で今日の話を聞いて嬉しかったことが一つあります。というのは、バルトン基金の創設です。この基金によって、バルトン忌のような純粋な行事の開催を財政的に支えることが出来ます。基金は、特別の人にもの凄く多額に拠出してもらう必要はない。心ある沢山の人達が少しづつ出し合って、基金をつくる。そして、このような行事の経費が賄われる。行事は、基金がある限り、ずっと続いて行く。

許さんだってきっと同じことを考えられるでしょう。ただ、許さんは、自分の会社の従業員は、もう生活の心配がないって言われるほどですから、スケールがもっともっと大きいですけれども。まさにこれこそが「人間道」に立つ経営です。許さんに関してはもっと話すべきことがあるのですが、時間がないのが残念です。

私は、謝先生の「善の循環」、許さんの「幸福の経営システム」、そして、後藤新平やバルトンさんの「幸せの循環サイクル」の考え方。いずれのサイクルでも要(かなめ)のところに「健康」が位置付けられる。まず健康でなければ幸せなんてやって来ない。だから、最も大切な健康を守るために、まず水道、きれいな水、環境、こういうふうに話が発展して行くのです。ですから、私はこの課題も、凝縮すれば謝先生がおっしゃった「善の循環」に尽きるような気がいたします。以上です。（拍手）

酒井：ありがとうございます。では、先ほどの順番で八田さん、次にお願いします。

八田：手短に。と言ってもまたしゃべりますが。許文龍さんのお話が出ましたので、最初に許文龍さんが博物館を作られたきっかけになったお話を。許文龍さんからご自身からお

聞きしたことです。日本統治時代のことでしたが、許文龍さんは子供のころ大変貧乏だったので博物館に行くお金がない。遠足か何かで行ったというようなお話をしたが、その時に日本人の学校の先生が自分を連れていってくれたと。

多分旅費とかを出してくれたのだと思うのですが、そのことが記憶に残っていて、自分が実業家として大成功した時に、費用を出して博物館を作られました。今、台南の高鉄駅のすぐ近くに、白亜の殿堂のような素晴らしい博物館がありますが、数年前までは自分の工場の一角にビルがあって、そこに無償で全員、大人も子どもも、とにかくただで博物館入っていいよ、ということでやってらっしゃいました。

テーマは、継承の難しさっていうことですので、そこだけ付け加えさせていただきます。與一は石川県の金沢の出身です。金沢には、「八田與一夫妻を慕い台湾と友好の会」という会があります。この会を創設したのが中川外司さんという、市会議員をやっていた方なのですが、市会議員を一期で降りて、八田與一を顕彰することを始められて、会を作りました。もう 40 年ぐらい前です。その会の方々が実は地元の金沢ではずっと顕彰活動を続けてくれていました。

ある時、許文龍さんから連絡があって、八田與一の胸像を「おまえにやるから勝手にしろ」と中川外司さんは言われたそうです。中川さんは、自分が個人としてもらうことはできないから、「ちょっと待ってください」と言って、いろいろ駆けずり回って、どっか展示する所はないのか探されたそうです。紆余曲折あったようですが、いまは金沢の 21 世紀美術館のすぐ裏側に、「金沢ふるさと偉人館」という所があって、そこに入れていただいたのです。

與一が入ったのは、まだふるさと偉人館に 5 人しか偉人がいなかった時で、3 人が同時に追加されたので 8 番目でした。「八田」の「八」なんですが、8 人目に入ったということです。しかしながら、金沢の人は與一のことを誰も知らなかったのです。市長も知らない、もちろん元総理も知らなかっただろうと思います。要は海外で、当時は国内だったのですが、本土ではない所で活躍した郷土偉人、郷土には何にも関係ないので知らなかっただと思ひます。「ふるさと偉人館」に入れていただいてから、北國新聞社さんがたいへん応援していただいて、ことあるごとに日本と台湾、あるいは烏山頭ダムの記事を載せてくれるようになりました。

そういうこと也有って、顕彰活動は 40 年続いている、この会では世代交代をし始めています。中川外司さんの息子さんの太郎さん、それからもう 2 人いらっしゃったのですが、1 人が西岡さんという方の息子さん、こういう方々が今継承活動の中心になって、僕よりもちょっと若い方ですけれども、動いていらっしゃる。もう 1 人、徳光さんという方がやはり金沢の出身で、会の代表を今お務めになっておられます。台湾にもう二十数年住んでいらっしゃいます。台北のすぐ北に北投温泉というところがありますが、そこに加賀屋さんの台湾支店というのを作った人が徳光さんで、誘致して自分も社長をやっていらしたのですが、NHK で一度特集されたことがあります。

そういう方々が金沢側と台湾側、台湾側はさつき申したように嘉南農田水利会の母体が毎年やってくれていますので、うまく連携を取って毎年慰靈祭を開いておられます。一方、金沢では、與一が生まれた2月21日を生誕祭としてやり始めてくれまして、こちらも15年ぐらい継続してされておられます。毎年2月になると私は金沢へ行き、5月には台湾に行くというようなことを続けていますが、地元の方々がやっぱり支えてくださっているのだなと思います。以上です。(拍手)

酒井：どうもありがとうございました。継承の難しさを乗り越えた例として伺いました。バルトン先生のケースも、継承の難しさをいかに乗り越えるかっていうのは大きな課題だと思っています。では、岡崎さん、一言お願いします。

岡崎：先人の偉業の継承ですよね。とくにアイデアはないのですが、2年前に松江バルトン会の5人で台北の自来水博物館を見学した時のことをお話します。土曜日でしたが、家族連れや子どもたちが、給水ポンプの建物、バルトンの展示ルーム、それから山の上の貯水池まで列を成して歩くのです。周りは木立もたくさんあって、環境はすごくいい所です。その姿に一番強い印象を持ちました。松江にも水道遺産があることはあるのですが、規模は小さいながらも、それらを生かした形でバルトンの業績を継承し続けていくことはできないかな、ということをずっと思ってきました。

先ほど原爆の語り部の話がありました。松江市は、出雲の国、神話の国です。「国譲り神話」で全国に知られているかもしれません、やはり記紀とか風土記とか、そういう文字の記録の前は、やはり人間が語り継いだという点が非常に大きいと思うのです。大人から大人へとか、大人から子どもへとか、次の世代へ語り継ぐっていうこと、今日もお爺さんの話は全然知らない、聞いたこともない、というお話がありましたけれども、家族の中でも意識的に語り継ぐとか、ましてや一般の人たちに訴えかけるっていう時に、そういう語り部的な役割を果たす我々のようなグループとか、皆さんのグループとか、あるいは地域のNPOとか、いろんなグループがありますので、語り部を増やしていく、あるいは、一緒にやっていくことが必要なかなと思ったりしています。

それと、藤原書店が『後藤新平—衛生の道』という本を2年前に出版しています。稻場先生も座談会で参画されておられますけれど、名古屋市では市内史跡巡りのルートのひとつとして、「衛生の道」という医学と衛生の歴史をめぐり、後藤新平や田野俊貞らの先人の業績に触れる学びの道を整備しているのです。後藤の故郷の奥州市はどうなっているのか存じませんが、松江でも小規模ながら、水源、浄水場、配水池などバルトンの活躍の跡をたどることはできますので、各地で「衛生の道」として整備して、全国をつないでいくといったようなこともできるかなと思います。そういう時に、中心的な旗振り役というか、まとめ役として中央で水循環文化研究協会が、重要な役割を果たしていただけるのではないか、という気持ちでおります。

酒井：ありがとうございます。われわれの担わなければならない課題をご指摘いただいたのかなと思います。今もおっしゃっていただきましたが、顕彰を継続していくためのいろ

いろいろアイデアについては、最後に一言ずつお聞きしたいと思っています。その前に、鄧さん、先人の功績を継承するうえでの課題についてお願いします。

鄧：実は、先ほど稻場先生の話にあったように、許文龍さんに私も本を翻訳するために会いに行きました。その時、彼は30分ぐらいずっとしゃべり続けました。その時に言われたことは、司馬遼太郎さんの『台湾紀行』という本の中に、国家とは何かということが書かれていると言われたのですが、私、恥ずかしくてお答えできませんでした。

その後は、スタッフの方が台南の浄水場（現在の台南山上花園水道博物館）へ連れていってくれました。その時、元々あったという濱野弥四郎の銅像はなくて残った台座に、飲水思源というような文字しか見当たりませんでした。そこに2005年、濱野さんの銅像をつくって寄贈いただいたのが許文龍さんです。

その後は2024年に台南市政府が、山上花園水道博物館を整備したのですが、その時、私たちは稻場先生をはじめ皆さんと行きました。稻場先生もよくおっしゃっておられたのですが、何が素晴らしいかというと、休日になると濱野さんとかバルトンさんのことについて、市民の舞台があって、子ども向けの人形芝居をやっていました。私は、このような活動を日ごろからやられているということにすごく感心しました。もうひとつは、これも稻場先生からうかがったのですが、濱野さんの銅像の向きです。どこを向いているのかというと台北に向いているということです。つまり自分の師であるバルトン先生を尊敬して、自分の先生のようにやっていかなければならないというような意思を持っているのではないかなど話してくれました。それに私たちも同感しました。

これからどのように継続するか、あまりアイデアありませんけれども、ただ本日は日本水循環文化研究会をはじめ、東京台湾商工会、あと台北駐日経済文化代表処などの支持を得て、このような盛大なイベントを開催することで、継承の道につながる本当にすごく大事なことだと思います。何といっても、バルトン先生のご子孫、濱野さんのご挨拶文、八田修一さんのような方に参加していただきて、本当に夢のようです。たいへんうれしいです。今後も、このようなイベントの時に、ぜひまたよろしくお願ひいたします。また一緒にPRしていきましょう。

顕彰活動を継続するためのアイデアや決意

酒井：なんか締めの言葉みたいな感じになってしまいましたね。では、最後に一言ずつ、先人の功績を顕彰に関することで、アイデアなり決意なり、これだけはやるべきではないかとか、最低限これが必要だと考えている、そういうことを本当に一言ずつおっしゃっていただきたいと思います。では、謝さんからお願ひします。

謝：継承することは難しさがあっても、克服できないわけではありません。ですから、諦めちゃいけません。さっきの鄧さんのように熱心かつ、楽観的にやつたら、何も問題ないと思います。頑張りましょう。AIを生かして、動画をうまく利用して、もっと若い人に知っていただけるようにしていきましょう。ありがとうございます。（拍手）

稻場：私は、台湾の市民の方々の水を守る活動は、日本より進んでいるのではないか、そう思っているのです。例えば、先ほど話が出ましたように、台南の台南山上花園水道博物館に行くと、バルトンさんの人形芝居の人形があるのですよ。もちろん、人形芝居が上演できる劇場もあります。これひとつ採っても、日本では見たことがないですからね。だから、私は、少なくとも啓発活動の面では日本より進んでいると思います。いろいろな工夫の跡が見えますから。

「日本でも台湾の実情が分かれば、参考になるな、知りたいな」と思うことが幾つかあります、時間がないので一つだけ申しましょう。

水を扱う仕事には公共性があります。ですから、水は単なる経済財ではない。何を言いたいかと言えば、水に関する事業の民営化問題です。私が心配しているのは「行き過ぎた民営化」という問題です。これが台湾ではどうなっているのか、ぜひ意見交換をしてみたい。水道民営化の模範生といわれたイギリスでは、今や民営化は失敗だった、再公営化すべきだと。しかも、この流れが今やある種の世界の潮流になりつつある。これが現実です。というのは、イギリスでさえ水道会社は、利潤だけはキッチリ確保し、それを株主配当に充てる。配当を優先しますから、施設の更新はおろそかになる。一方で水道料金を上げる。これでは、一般市民は、たまたまものじゃありません。ですから、イギリス国民の相当数は、「もう民営化は駄目だ」と、こうなっているのです。皆さん、岸本聰子さんの『水道、再び公営化！』(集英社新書、2020年3月)を読まれましたか。ぜひ読んで下さい。これを読むと、世界の水道の再公営化に向けた流れが非常によく分かります。

実はこの本の中に、許さんの「幸福の経営システム」のような仕組みを制度的に取り入れて行こうじゃないかっていうような考えが書いてあるのです。興味深い傾向です。私はそういう意味で、こういった先駆的な活動が台湾には既に芽生えていそうに思えるのです。私は、ぜひ台湾の実情を知りたい、また聞かさせてほしい。意見交換をぜひやるべきだ。こういうふうに思っています。日台の市民間の情報交流は、双方にとって有意義なのではないでしょうか。

酒井：分かりました。そういう機会を近い将来、何とか工夫して設けたいですね。では、岡崎さん、八田さん、お願いします。

岡崎：最後に、松江バルトン会は8名の弱小グループなのですが、その総意ということで申し上げたいと思います。実は、2024年の秋に松江で実施した衛生思想展示会を台北で開催したという希望を持っております。すでに会場は2年前から下見していました、台北大学医学人文博物館です。ここには、台湾総督府医学校の初代校長から3代目の校長、山口秀高とか高木友枝、堀内次雄という人の胸像が並んでいます。2番目の高木友枝は、今日ご紹介した田野俊貞の友人もあるのです。そういう繋がりもあります。それから、衛生思想という言葉も中身も、まだ台北では一般的ではないということもありますので、松江バルトン会としては、総力を挙げて展示品を運びたいという希望を持っています。謝先生、ぜひご支援ご指導をお願いしたいというふうに思います。よろしくお願いします。

(拍手)

八田：もともと明治維新の時に、明治政府が抱えていた問題はコレラでした。1年間に10万人以上の日本人がコレラで亡くなった年が2回あります。それを防いでいてくれたのがバルトン先生。台湾でやつていただいたのは濱野先生。台湾では、その思想を守り続けていると僕は思います。5年前、2019年に武漢でコロナウイルスが発生した時に、台湾はすぐに止めました。何を止めたか。中国から人が入ってくるのを12月の何日かに止めています。日本政府は、2月の旧正月で中国からいっぱいお客様が来るまでは止めずに、それから止めたのです。何のことはない、まん延しましたよね。覚えていますよね、皆さん。台湾政府は水際で止めました。これは、後藤新平さんや、濱野先生やバルトン先生が作られた水を守り、衛生によって、生命を守るという、この思想をいまだにかたくなに守っているからできたんだと思います。振り返って日本はどうなっちゃったかと思うと、本当に寂しい限りです。

ですから、単に顕彰活動をするのが目的ではなくて、その思想をどう今後、未来に生かしていくかっていうところまでをもっていければ、この水を守るという思想、水循環の思想は、日本でも定着できると思っています。以上です。(拍手)

酒井：どうもありがとうございました。鄧さん、いかがですか、一言。

鄧：分かりました。生命の維持は水です。それで生命の悠久をやっぱり私たちは守っていかなければならぬし、持続していかなければならぬです。そのために先ほど皆さんおっしゃったことですが、プラス思考、交流が絶対に必要です。「交流」という字ですが、「交」は人と人の交じり合うということです。それで「流」の字は、水が満たされて川になりますというと書きますよね。私たちは、水のように交流をどんどんしていかなければなりません。これからも交流を続けたいと思っていますので、今後ともよろしくお願いします。

(拍手)

酒井：どうもありがとうございました。本当にまとめの言葉をおっしゃっていただきました。せっかくの機会でしたのに、時間ばかり気にさせてしまってたいへん申し訳なかったと思います。先人の功績を顕彰するということは、これから社会をより健全なものにするため、大切にしなければならない価値の継承につながる活動であると思います。本日の議論がそのための一歩になれば、主催した者としてこれ以上の喜びはありません。登壇者の皆様、会場の皆様、進行にご協力いただきありがとうございました。

あとがき

昨年、駐日台北経済文化代表処前代表を離任された謝長廷氏が、バルトン忌に参加されたいとの強いお気持ちがあると伺い、4月からバルトン忌2025の企画をスタートさせてから、この記念講演会報告書の編集で、一連の仕事を終えることができました。

バルトン忌2025では、日台でバルトンの功績を顕彰することの意味を考えることをテーマとしました。講演会での議論を通し、顕彰活動は、より健全な未来の社会を築くため、公共性、衛生思想、水循環といった「価値を継承」する営みであると確認できたように思います。謝前代表が、ご挨拶、座談会でのご発言で繰り返し述べられた「善の循環」は、この価値の継承も含意するものと思います。この講演会での議論から、今後も日台で水インフラに関わった先人の顕彰活動の「環」を広げていくことにつなげていくことができれば、担当したものとしてそれ以上の喜びはありません。

バルトン忌2025の開催にあたっては、謝前代表のもその立上げにおいて貢献いただいたバルトン基金を活用するとともに、本企画への協賛を募らせていただいた結果、日台双方の多くの企業、市民団体、報道機関様、ならびに個人の方からご協賛をいただき、開催することができました。心より御礼申し上げます。

(酒井 彰)

参 考 資 料

バルトン忌 2025 特別企画プログラム	69
日本水循環文化研究協会バルトン関係資料	70
日本水循環文化研究協会・会報「ふくりゅう」関連記事	71
バルトン略年表	76
巴爾頓年表	77
関連臺灣史年表	81

バルトン忌 2025 特別企画プログラム

午前の部 10:20~11:00 墓参（青山靈園）

午後の部 記念講演会

13:00	開会の辞	総合司会・渡辺勝久（水循環協）
	主催者あいさつ	酒井彰（水循環協）
13:10	台北駐日経済文化代表処 謝長廷前代表挨拶	
13:25	バルトン先生と台湾に縁のある方々からの挨拶	
講演		
14:00	W.K.バルトンの妹、画家メアリー・ローズ	稻場日出子（水循環協）
14:25	バルトンの松江市衛生事項に関する復命書	稻場紀久雄（水循環協）
	と台湾～主に提出月日に関する仮説～	
14:50	衛生思想展 2024 の成果から	岡崎秀紀（松江バルトン会）
15:10	休憩（コーヒーブレーク）	
座談会		
15:30	バルトン先生が拓いた日台の水インフラに 関わる人の「環」	謝長廷、八田修一（台湾世界遺産 登録応援会）、岡崎秀紀、稻場紀 久雄、鄧淑晶、進行：酒井彰
16:50	集合写真	
17:00	閉会の辞	

日本水循環文化研究協会バルトン関係資料（Webpage 掲載）

スコットランドで育った W.K.バルトン（1856～1899）は、明治期の我が国において上下水道技術者を育成するため、お雇い外国人として 1887 年（明治 20 年）に招聘されました。来日後は、帝国大学工科大学衛生工学講座の初代教授、内務省衛生局雇工師を兼務し、幾多のエンジニアを育成するとともに、全国 28 もの都市をめぐり、上下水道事業に関する助言・指導を行い、日本の「衛生工学の始祖」と仰がれています。

本会では、前身の日本下水文化研究会の時代から、毎年、8 月 5 日の命日に青山墓地の墓前にお参りし、講演会などを開いてきました。そのなかには、1999 年の没後 100 年記念事業、さらに生誕 150 年を記念する 2006 年及び没後 110 年の 2 回にわたり、日本・スコットランド交流事業を東京・アバディーン・エдинバラで開催しました。

本会の Webpage では、本会が行ってきた W.K.バルトンを祈念する活動の記録を取りまとめてまいります。

- ① 日本下水文化研究会法人化 20 周年記念誌所収「W.K.バルトン記念事業」
- ② W.K.バルトン記念日英交流事業 2009 報告書（W. K. Burton Memorial Anglo-Japanese Exchange Project）
- ③ バルトン忌ならびにバルトン記念事業の足跡

①は日本下水文化研究会法人化 20 周年記念誌に掲載されたバルトン記念事業に関する章です。②は 2009 年の日本とスコットランド記念交流事業の記録です。Webpage で、それぞれ文字をクリックしていただければアクセスできます。③については、本会が刊行を続けている機関誌に収められたバルトン忌での講演録です。1999 年に行われたバルトン没後 100 年記念シンポジウム、1998 年以前、2000 年以降の講演録に分けて掲載しております。バルトン忌の講演録リストも掲載されています。

青山靈園のバルトン墓地の前には下記の看板が立っています。右の QR コードをクリックしていただくとこのページにリンクします。



墓地の前の看板（左は靈園によるバルトンの紹介）と QR コードを拡大したもの

日本水循環文化研究協会・会報「ふくりゅう」関連記事

バルトン忌 2025 特別企画～謝長廷前大使を迎えて～の概要

今年のバルトン忌では、台湾の謝長廷台北駐日経済文化代表処大使をお迎えし、記念事業を企画しております。本稿では、本協会が継続的に行ってきましたバルトン顕彰活動の意義を再確認しておきたいと思います。

承知のように William Kinninmont Burton は、日本政府の招聘に応じて 1887 年来日し、帝国大学工科大学で衛生工学の講座をもち、



多くの上下水道技師を輩出するとともに、内務省衛生局の顧問技師として日本各地の上下水道計画の指導にあたり、日本の衛生工学の礎を築きました。その後、内務省衛生局長であつた後藤新平の要請により、1896 年から約 3 年間台湾に渡り、水源調査や水道計画づくりに従事し、当時悪霊島と称せられたかの地で、公衆衛生の基礎を築くため献身的な努力を惜しませんでした。

本協会では、前身の日本下水文化研究会の発足時より、毎年バルトン忌を開催してまいりました。バルトン忌が恒例化されたのは、「年に一度衛生工学の原点に戻ってその在り方を考えることが必要」(稲場紀久雄、「下水文化研究」34 号巻頭言) という理由からでした。1999 年には、没後 100 年を記念するシン

ポジウムを開催し、2006 年、2009 年にはバルトンの生誕地スコットランドで記念交流事業を行いました。母国では彼の偉業を知る人は少なく、交流事業はスコットランドの人たちにバルトンの功績を知っていただくことを意図しておりましたが、敬意をもって受け入れられ、日ス双方は協働することにより記憶に残る事業を行うことができました。2006 年の交流事業の一環で、バルトンが幼少期を過ごしたエジンバラのクレイグハウスの前に建立した記念碑は、近くの公園に移されました。公園を訪れる人々に日本人のバルトンへの深



バルトン記念碑の前で（左から製作者グラシエラさん、稲場前代表、エジンバラ市長、2006 年）

い感謝と敬意を伝えています。

回を重ねてきたバルトン忌で行われた数々の講演録はホームページで読めるようになっており、青山墓地の墓前に立てられた看板の

QR コードからも本協会ホームページのバルトンのページにリンクしています。これは、バルトン先生の功績や本人の人となりを伝えるためだけでなく、それを継続的に顕彰する者がいることを伝えたいためでもあります。ある英国人ジャーナリストからは、このような行為に驚嘆の声があがっています（コリン・ジョイス「ニッポン社会」入門、生活人新書、2006年）。

一方、台湾でも多くの人が、バルトンの功績に対する感謝の念を抱いてきました。中国には「飲水思想」という言葉があり、人が水を飲むとき、必要な施設を作った人、井戸を掘った人の恩を忘れてはならないという教訓を意味しますが、台湾ではバルトンへの恩義を忘れず、その功績を讃えるため、銅像が建てられました。

本協会と台湾の関係では、稻場前代表の著書（「都市の医師」（バルトンから衛生工学を学び、ともに台湾に渡った濱野彌四郎氏の評伝）、「バルトン先生明治の日本を駆ける！」）が台湾で翻訳出版（鄧淑晶・鄧淑瑩訳）されたことによって、台湾の人たちがもともと尊敬の念を抱いていたバルトンの生き立ちから縁の人たちのことまでを知る機会となりました。そのことが戦時中金属回収命で供出されていた自來水博物館のバルトン胸像の復元事業（除幕式は 2021 年日台で同時開催）につながったことだと思います。今回お迎えする謝長廷さんは昨年 8 月まで台北駐日経済文化代表処大使を務められ、自來水博物館のバルトン像復元事業にも尽力されました。また、翻訳を担わされた鄧淑晶さんは、台湾と本協会の橋渡し役となり、今回の日台交流をひとつの目的とした特別企画立案にも参画されています。

バルトン忌 2025 では、バルトン忌をはじめとするバルトン顕彰活動を継続し、後世に引き継いでいくことの意義を再認識し、我々と同じく、バルトンを顕彰しようという熱意をもっておられる台湾の方々との交流を深める機会としたいと考えています。

現時点では、お忙しい謝前大使の日程をすでに確保していただいていることから 8 月 5 日に開催すること、午前中墓参、午後記念講演会とすること、本協会が主催すること以外は決まっておりません。

講演会プログラム等企画内容は今後検討のうえ、会員の皆様にご案内してまいります。会員各位におかれましては、バルトン忌恒例化の意味を振り返り、当日の参加にとどまらず、事業への協賛、運営へのご協力を切にお願いいたします。



バルトン胸像除幕のシーン（台北）
出所: TAIWAN TODAY (2021/3/31)

※ 本稿作成にあたり齋藤博康「バルトンと台湾の水道」（機関誌「下水文化研究」11 号）を参考にしました。

バルトン忌 2025 が開催されました 特別企画：駐日台湾前大使 謝長廷氏を迎えて

8月5日、バルトン忌2025が開催されました。今年のバルトン忌（没後126年）は、昨年離日された駐日台北経済文化代表処前代表（大使）の謝長廷氏が、バルトン忌に参加したいとの強いお気持ちがあるということを謝さんと親交の深い鄧淑晶さん（本会会員）からお聞きしたところから企画が始まりました。謝前大使には、バルトン墓所の整備ならびにバルトン基金創設でたいへんお世話になっており、バルトンの功績を日台交流のもとで顕彰することで、そのお気持ちにお応えすることとし、バルトン基金を活用して行うこととにいたしました。4月中旬より、プログラムを作成しつつ、この事業への協賛を募ってまいりました結果、日台双方の多くの企業、団体様、ならびに個人の方からご協賛をいただき、開催にこぎつけることができました。

当日は猛暑でしたが、午前中の墓参、午後の記念講演会、そして夜の懇親会（東京台湾商工会主催）と充実した1日でした。

墓参には、約30名が参列しました。墓前では、謝前大使をご紹介した後、墓所管理者である榎原明さん（バルトンの曾孫・熊本在住のご子息である榎原衛さんからのご挨拶をいただき、参列者が一人ずつ献花をしました。猛暑ということもあり、40分ほどで終了し、銘々午後の会場へ向かいました。



バルトン忌の参列者（バルトンの墓前にて、鈴木玲子さん提供）

午後は、アルカディア市ヶ谷で「記念講演会」を開催しました。このプログラムでは、バルトンが1896年（明治29年）、台湾総督府衛生工事顧問技師として、衛生工事調査を開始して以降、台湾の公衆衛生向上に多大な貢献を果たし、今も台湾の人々から顕彰されている濱野弥四郎、八田與一両氏のご子孫をお招きし、先人の功績を顕彰することの意味について考えることを主題としました。

主催者からは、上記した経緯、協賛者ならびに協力者への謝意を述べさせていただくとともに、謝前大使をお迎えしたこの事業を契機として、日台交流のもとで、これから顕彰活動を考える機会にしたいと挨拶させてもらいました。

続いて、当日の主賓、謝前大使（現・台湾総統府資政）からご挨拶をいただきました。駐日代表8年間の思い出とともに、「善の循環」、すなわち、他者を助ける、恩返しをする

ということを繰り返していくことで、世界平和につなげていきたい、そして、バルトン先生の功績を顕彰することは「善の循環」をつくることになると述べられました。

その後、バルトン先生と台湾にご縁のある方々からの挨拶をいただきました。バルトン先生の長女多満さんの孫で、墓地管理者の榎原明さんの従弟である榎原政博氏は岡山から参加され、生前の多満さんとは葬儀が出会いとなつたことなど、思い出を語っていただきました。バルトンとともに台湾に渡り、バルトン亡き後も台湾の公衆衛生向上に貢献した濱野弥四郎氏の曾孫の濱野靖一郎氏（島根県立大学准教授）は当日所用のため欠席されました、同僚で台湾の研究をされている深串徹氏が挨拶文を代読されました。昨年、松江バルトン会が開催した展示会（後述の岡崎氏の講演で紹介）で弥四郎が使っていたバルトンのテキストを手に取った時に受けた印象などが語られました。濱野弥四郎に師事し、水道分野での活動を引き継ぐとともに、水利事業「嘉南大圳」により、今も台湾の人々から尊敬を集めている八田與一氏の孫の八田修一氏は、父の晃夫氏が読み込んでいた「都市の医師」（稻場紀久雄著）を持参され、濱野弥四郎を通してバルトンを知ったこと、台湾の人たちによる八田與一の顕彰事業を通じて、台湾との交流を続いていることの意味について語られました。

最近のバルトンに関わる講演は、3題。稻場日出子氏の「W. K. バルトンの妹、画家メアリー・ローズ」では、メアリー・ローズが明治27年の東京の風景を描いた水彩画2点（当日会場に展示）が日本に帰ってきた経緯が紹介されました。ともに画才にあふれたメアリー・ローズとバルトンの曾孫で日本画家であった鳥海幸子さんの命日が同じということから、130年という時間を超えた不思議で

美しいつ ふくりゅう 116号（2025/9/17）
に語られました。

稻場紀久雄氏の「バルトンの松江市衛生事情に関する復命書と台湾～主に提出年月日にに関する仮説～」では、日付が抜けている復命書について、日付がない理由を4つあげられました。さらに、復命書の内容で重要な点は、バルトンが台湾での経験に基づいて検討した平坦な地形であっても汚濁物を堆積させない排水管の設計であり、大藤高彦による京都の計画でもこのことの重要性が記されていたと指摘されました。しかし、こうした技術の系譜が途切れ、利便性やコスト優先の設計が主流となってしまった結果、行田市で人命が奪われた硫化水素事故のような悲劇が起きていると警鐘を鳴らされました。

松江バルトン会の岡崎秀紀氏は、2024年10月に「松江市における衛生思想の歴史と今」と題する特別企画展を開催したことを報告されました（展示会についてはふくりゅう 114号参照）。展示会で資料を収集するなかで、バルトンが、下水道こそが衛生の改善に寄与する、その整備の重要性を強調していたということを学んだと述べられました。また、この展示会の『図録』を最近アマゾンから刊行されたこと、8月5日の山陰中央新聞に、その刊行についての記事が、松江バルトン会会长・田野俊平氏の「コロナ禍で私たちは衛生の大しさをかみしめた。衛生思想を広めた先人の業績を振り返る良い機会だ」ということばとともに掲載されていることが紹介されました。

講演会の最後のプログラムは、「バルトン先生が拓いた日台の水インフラに関する人の『環』」と題する座談会。登壇者は、謝長廷前台湾大使、八田修一、稻場紀久雄、岡崎秀紀、鄧淑晶（以上敬称略）で酒井が進行役を務めました。議論は、①先人の功績を顕彰すると

ふくりゅう 116号（2025/9/17）



講演会後の記念撮影（前列中央が謝長廷前代表、鈴木玲子さん提供）

は？②先人の功績顕彰を継続するうえでの課題、③日台でともに顕彰活動を継続するためのアイデアや決意という順で 5 人の登壇者に発言をお願いしました。水を守ることの重要さが改めて強調され、バルトンをはじめとする公衆衛生の基礎をつくることに貢献した人たちへの顕彰活動が、感染症対策にも生かされてきたのではないかといった発言があり、謝前大使が提唱する「善の循環」を築くため、今後も日台で水インフラに関わった先人の顕彰活動をさまざまなかたちで継続していくこうという決意が表明されました。議論を通して、顕彰とは先人や過去の技術を称賛するだけでなく、より健全な未来の社会を築くため、公共性、衛生思想、水循環といった「価値を継承」する営みであるのではないかと認識しました。

18 時からは東京台湾商工会の主催で「謝長廷先生を囲む懇親会」が行われ、岡崎氏によるオカリナ演奏や台湾の参加者による自作の歌の披露など和やかに日

台交流の場が繰り広げられました。この懇親会での出来事の一つが長与専歳のご子孫博典氏との出会い。氏が会長を務める企業グループのひとつが懇親会の看板製作を請負ったことから、「バルトン」に関わるイベントということで博典氏が参加してくださいました。懇親会を通じ日本でビジネス展開しておられる台湾の方々のバイタリティを強く感じました。

日台の多くの団体からの協賛のほか、数多くの方々のご協力によって、バルトン忌 2025 を実施することができました。心より感謝申し上げます。なお、「バルトン忌 2025 特別企画」の報告書作成を進めていますので、その刊行をお待ち願います。



懇親会で合唱する台湾の人たち

W. K. バルトン略年表

西暦年(和年号)	バルトンの生涯	バルトンの仕事	その頃の日本でのできごと
1856年(安政3年)	エディンバラで誕生(5月11日)		前年 「安政大地震」
1871年(明治4年) ~73年(明治6年)	エディンバラ・カレッジエイト・スクールで勉学		明治5年 新橋横浜間鉄道開通
1873年(明治6年) ~78年(明治11年)	ブラウン・ブラザース社に入社 技術見習者として修業を積む		明治6年 銀座煉瓦街完成
1880年(明治13年)	ロンドンで叔父コスモイネスと共同で 「イネス&バルトン・エンジニアリング」を設立		明治12年 東京府がコレラ患者避 病院を開設
1882年(明治15年)	衛生保護会主任技師となる	著書「写真のABC」出版	明治15年 日本銀行創立
1887年(明治20年)	日本政府の招聘により来日(5月20日) 帝国大学衛生工学講座初代教師となる	後藤新平らと東北地方主要都市の衛生 調査を行う・7月	明治20年 東京に電灯がつく
1888年(明治21年)	内務省衛生局雇工師兼職となる(1月1日) 東京市区改正委員会上水下水設計調査委 員主任となる(10月12日)	磐梯山噴火調査を行う・7月 「東京市区上水設計第一報告書」を提 出・12月	明治21年 市制、町村制公布
1889年(明治22年)		「東京市下水設計第一報告書」を提 出・7月	明治22年 大日本帝国憲法発布
1890年(明治23年)	浅草凌雲閣・総監督(基本設計担当)	浅草雲園完成 11月13日	明治23年 第一回帝国議会開く
1891年(明治24年)	長女多満(たま)誕生 英國土木学会会員となる	濃尾大地震被災地撮影・10月 写真集『日本の大地震 1891』出版	明治24年 上野一青森間鉄道開通
1892年(明治25年)		著書「都市の給水」出版	明治25年 伝染病研究所創立
1893年(明治26年)	荒川満津(まつ)と結婚	J. ミルンとの共著で写真集「日本の大 地震」を出版 写真集「日本の生活風景」を出版	明治26年 碓氷峠にアプト式鉄道 開通
1894年(明治27年)	勲四等旭日小綬賞を贈与される(5月)		明治27年~28年 日清戦争
1895年(明治28年)		写真集「日本の力士と相撲」出版	
1896年(明治29年)	帝國大学工科大学衛生工学教師解職 (6月20日) 台湾総督府衛生工事顧問技師嘱託となる (8月6日) 台湾全土の衛生工事調査と台北市、台中 市、基隆市の上下水道の調査設計を委 嘱される(8月)	「衛生工事調査報告書」を台湾総督府 に提出	日清戦争後明治28年に下関条約 により台湾が日本に譲される
1897年(明治30年)		台湾南部諸都市の衛生情況調査	明治30年 各地に米騒動起こる
1898年(明治31年)		台北市第2期上水道水源調査	明治31年 東京市改良水道通水 (日本橋・神田)
1899年(明治32年)	英國への休暇帰国を願い出て日本に向か い 東京で急逝(肝臓アブセス) 享年43歳		明治32年 東京市水道工事完成。 落成式12月
			(出典: W.K.バルトン生誕150年記念誌)

巴爾頓年表

西元年 (日本年號)	巴爾頓的生涯與重要事件	日本的事件
一八五六 安政三年	<p>*父親約翰·希爾·巴頓和母親凱薩琳·伊內斯的長男、出生於愛丁堡舊市區的羅利斯頓廣場廿七號(五月十一日)</p> <p>*父親是律師、歷史學者</p> <p>*母親是提倡女性人權的前衛推動者</p>	<p>*美國駐日總領事湯森·哈里斯來日就任(十月廿一日)</p> <p>*吉田松陰、松下村塾開校</p>
一八六一 文久二年	<p>*遷居至克雷格宅邸、在美麗的郊區度過幸福快樂的少年時代</p>	<p>*高輪東禪寺英國公使館襲擊事件</p> <p>*幕府遣歐使節團出航、福澤諭吉隨同</p> <p>*(一八六三年伊藤博文等人前往英國)</p>
一八七一～一八七三 明治四～六年	<p>*亞瑟·柯南·道爾(小三歲)是親同手足的兒時玩伴</p> <p>進入愛丁堡高等專科學校學習</p>	<p>*岩倉遣外使節團出航(一八六三年十月八日)</p>
一八七二 明治五年	<p>遠眺投宿愛丁堡皇家飯店的岩倉遣外使節團團員</p>	<p>*新橋一橫濱間的鐵道開通</p> <p>*伊藤博文副使向格拉斯哥大學提出工部省工部寮工學校教師派遣之申請</p>
一八七三～一八七八 明治六～十一年	<p>作為安東尼·貝斯·布朗的徒弟、進入布朗兄弟(船舶機械製作)公司學習技術</p> <p>從印度歸國的舅舅(古斯摩·伊內斯·朱尼爾)成為英國土木學會會員(一月十五日)、跟著舅舅學習土木衛生工學等技術</p>	<p>*明治六年：工部寮工學校開設(亨利、戴爾、米倫等九名被派遣至日本)</p> <p>*(一八七七年：西南戰爭日)</p> <p>*大久保利通被暗殺(五月十四日)</p> <p>*竹橋騷動鎮壓(八月廿三日)</p>
一八七八 明治十一年		<p>*(一八七九年：日本松山霍亂疫情發生、死者高達十萬人)</p>
一八八〇 明治十三年	<p>*在倫敦與舅舅合夥設立「伊內斯&巴爾頓工程技術顧問公司」</p> <p>*和舅舅共同執筆撰寫《一般住宅衛生檢查》一書發行</p>	<p>*井上外務卿向各國宣布條約修正方案(七月六日)</p>
一八八一 明治十四年	<p>*父親約翰·希爾逝世(八月十日)</p> <p>*列入英國攝影協會會員(十一月八日)</p>	
一八八二 明治十五年	<p>*晉升為倫敦衛生保護協會主任技師</p> <p>*在英國攝影協會的總會上朗讀〈修改明膠過程〉論文</p> <p>*著書《現代攝影術ABC》發行(出版)</p>	<p>*日本銀行設立</p> <p>*東京的芝、神田等地區出現霍亂疫</p>

西元年 (日本年號)	巴爾頓的生涯與重要事件	日本的事件
	德語版、法語版等、並再版多次、 是英國攝影界最被寄予厚望的攝影家	情、死者超過三萬人 * (一八八三年大日本私立衛生會創設)
一八八四 明治十七年	在倫敦萬國衛生博覽會時、遇見永井久一郎	*東京府神田污水下水道施工 *永井前往歐洲各國考察、調查上下水道制度
一八八六 明治十九年	*接受帝國大學工科大學招聘、遠從英國前來擔任衛生工學教師 *渡邊洪基校長委請駐英公使河瀨真孝面試人選 *來自河瀨公使的面試合格 *在英國攝影記者送別會上被推薦成為英國攝影協會榮譽會員 *經由美國來日 *就任帝國大學工科大學土木工學科衛生工學首位教師(五月廿六日) *舅舅(古斯摩·伊內斯·朱尼爾)逝世 *與後藤新平等人進行北日本主要都市的衛生調查(七月)	*帝國大學令公布(三月二日) *未曾有的霍亂疫情大流行、首都東京成為「瀕死的都市」(全國患者十五萬人、死者十一萬人)
一八八七 明治二十年		*永井久一郎出版《巡歐紀實衛生二大工程》(四月一日) *鹿鳴館白熱電燈點燈(首次的點燈營業)
一八八八 明治廿一年	*進行磐梯山火山噴發調查 *擔任東京市區改善委員會自來水供水及污水下水道設計調查委員會主任(十月十二日) *提出「東京市區供水設計第一報告書」(首都東京水道計畫)(十二月) *受託擔任內務省衛生局顧問技師(十二月廿四日) *日本攝影會設立、就任書記(六月七日) *提出「東京市區改善污水下水道設計第一報告書」(七月六日)	*市制・町村制公布(四月廿五日) *磐梯山火大噴發(死者四百四十四名)(七月十五日) *東京市區改善條例公布(八月十六日)
一八八九 明治廿二年	*巴爾頓弟弟古斯摩·伊內斯·巴頓和弟媳蕾貝卡來日(七月七日) *設計監督淺草十二樓(凌雲閣) *弟弟古斯摩·伊內斯驟逝於上海(十月卅一日) *淺草十二樓開始營業(十一月十一日)	*大日本帝國憲法公布
一八九〇 明治廿三年		*水道條例公布(二月十二日) *第三屆國內勸業博覽會舉辦 *第一屆帝國議會開議(十一月廿五日)

西元年 (日本年號)	巴爾頓的生涯與重要事件	日本的事件
一八九一 明治廿四年	*成為英國土木學會準會員 *濃尾大地震受災地調查(十月廿八日)	*上野—青森間鐵道開通 *濃尾大地震房屋全燒毀約十四萬戶、死者約七千二百名
一八九二 明治廿五年	*攝影集《日本的大地震一八九一》出版 *攝影集《日本的火山：第一冊 富士山》出版 *馬德克《小鳶小姐—明治廿三年的羅曼史》的攝影師(凸版印刷純中階調攝影製版印刷) *長女多滿誕生(九月二十日)	*傳染病研究所設立
一八九三 明治廿六年	*英國攝影展覽會舉行，五月十四日起為期一個月	
一八九四 明治廿七年	*妹妹瑪麗·蘿絲·希爾來日(四月) *與荒川滿津結婚(巴爾頓四十歲·滿津廿二歲)(五月十九日) *妹妹瑪麗·蘿絲·希爾離開日本(十月六日) *攝影集《日本的戶外生活風景》出版 *《都市的供水及水道設施的建設》出版 *東京地震引起淺草十二樓大樓龜裂進行整修工程	上陸檢疫以防瘟疫的擴散(六月七日) *東京地震(M7.0) (六月二十日) *向清朝宣戰(八月一日)
一八九五 明治廿八年	*米倫與妻子利根一起離開日本(六月廿一日) *攝影集《日本的力士與相撲》出版	*日清條約(四月十七日) *台灣割讓給日本、台灣總督府條例制定(八月六日)
一八九六 明治廿九年	*辭任帝國大學工科大學衛生工學教師(六月二十日)(後任中島銳治) *勳四等旭日小綬章授贈 *依後藤請託就任台灣總督府衛生工程技術顧問 *受台中市、基隆市上下水道調查委託(八月) *向總督府提交《衛生工程調查報告書》 *考視察上海、香港、新加坡居留地(十一月下旬起三個月)	*河川法交付(四月八日) *日本郵輪、歐洲定期航路開始
一八八九～一八九六 明治二十～明治廿九年	*作為內務省衛生局技術顧問，在東京、大阪、京都、名古屋四大城市，函館、橫濱等五個開港都市，仙台、廣島等縣廳所在城市，以及下關、門司等二十八個都市進行上下水道計畫的指導 *衛生工學技術者人才輩出	

西元年 (日本年號)	巴爾頓的生涯與重要事件	日本的事件
一八九七 明治三十年	*台灣南部各城市的衛生狀況調查	*傳染病預防法公布 *京都帝國大學設立 *帝國大學改稱為東京帝國大學 (六月廿二日)
一八九八 明治卅一年	*後藤新平就任台灣總督府民政長官 *台北第二期自來水道水源調查 *調查時不幸感染地方風土病九死一生 *母親凱薩琳逝世於伯雷斯金宅邸	*東京市公所開設(十月一日) *痢疾、傷寒桿菌大流行
一八九九 明治卅二年	*準備回英國度假前在東京遽逝(八月五日)、享年四十三歲 *葬於青山靈園(八月七日)	*東京市水道工程完成 *瘟疫患者出現(十一月五日)
一九〇〇 明治卅三年	*妹妹瑪麗·蘿絲過世(六月五日) *門生、友人、熟識者共同攜手建置巴爾頓墓碑	*下水道法、污物掃除法公布
一九〇一 明治卅四年	*巴爾頓的永田町官舍全燒毀(二月九日) *滿津及多滿兩人受貝爾茲花、普林克利、巴爾頓同父異母的姊姊及米倫等人支援	*英外相向林公使提出日英同盟 條約草案(十一月六日)

関連臺灣史年表

一五四四	ポルトガル船が台湾の近くを通過し、この島をフォルモサと名づける
一五九三	豊臣秀吉が台湾の「高山国」に入貢させようと原田孫七郎を使者として派遣したが、実現せず
一六〇九	徳川家康が有馬晴信に命じて台湾を攻撃。原住民を捕虜として連れ帰る
一六二四	八月、オランダの東インド会社が台南に到着。台湾の西部を占領
一六二六	スペインが台湾北岸を占領 浜田弥兵衛が台湾を襲撃
一六二七	オランダがキリスト教を本格化する
一六二八	七月、浜田弥兵衛とオランダ長官ヌイスとが講和を結ぶ
一六三四	ゼーランジャ城(現・安平古堡)完成
一六四二	オランダが台湾北岸からスペインを追放
一六五三	プロビンシア城(現・赤嵌楼)完成
一六六一	三月、鄭成功が澎湖島に上陸、台湾にいるオランダに攻撃開始 十二月、オランダが投降、台湾から撤退する
一六六二	五月、鄭成功死去(三九歳)。アモイにいた長男の鄭經が後継者に
一六八四	清朝の台湾統治が始まる
一八五六	淡水、基隆、安平、打狗(現在の高雄)を開港、宣教師のキリスト教を許可
一八五八	天津条約によって台南・安平(アンピン)港や基隆港が欧州列強に開港される
一八七一	牡丹社事件。宮古島の漁民六六人が台湾に漂着、五四人が先住民に殺害される
一八七四	日本の台湾出兵(征台の役)。以後、清朝は台湾積極開発政策を採る
一八八四	清仏戦争が勃発して台湾もフランス軍に攻撃される
一八八七	劉銘伝が基隆-台北間に鉄道を敷設
一八九四	七月、日清戦争が始まる
一八九五	四月、日清戦争後の下関条約で、台湾および澎湖諸島が清朝から日本に割譲される 五月、アジア最初の共和国ともされる台湾民主国が成立 六月、日本軍が基隆、台北、淡水と北部の主要拠点を制圧。台湾総督府が始政式典を挙行 十月、台湾民主国が崩壊
一八九六	原敬が台湾事務局に同化と非同化の「台湾問題二案」を提出。同化政策を主張
一八九七	台湾住民の国籍選択最終期限 「台湾売却論」の登場
一八九八	土地調査事業が始まる
一八九九	三月、四代総督に児玉源太郎就任、後藤新平も同時に総督府民生局長に就任 九月二六日、「株式会社台湾銀行」の営業開始
一九〇〇	台南-高雄間に鉄道開通
一九〇一	十二月、三井財閥による台湾製糖株式会社成立 総督府が水利事業の整備のため「台湾公共埤圳規則」を公布 十月、台湾神社鎮座式
一九〇二	十一月、地方制度変更。台湾全土に二〇の庁を設ける
一九〇三	抗日勢力が壊滅的な状態となる
一九〇五	土倉龍治郎が台北電気株式会社を設立 土地調査事業が終了
一九〇八	この年度より日本国政府の補助金を辞退 台湾南北を縦貫する鉄道の縦貫線が完成

一九一〇	台湾初の人口調査。三一〇万人
一九一一	二月、阿里山鉄道開通
一九一五	最後の抗日武装反乱・西来庵事件（タパニー事件）が勃発
一九一八	初の文官総督、田健治郎が八代総督に就任 総督府の本庁舎が完成 台湾総督明石元二郎が各公営・民営発電所による台湾電力株式会社を設立
一九二〇	八田與一が「嘉南大圳」建設に着工
一九二一	一月、林獻堂らが台湾議会設置運動を始める 十月、台湾文化協会発足。林獻堂が会長に就任
一九二二	蓬萊米の栽培に成功。台湾の米の生産が大きく進展する
一九二三	鳥居信平が設計した地下ダム「二峰圳」が完成
一九二五	五月、治安維持法が台湾でも施行される
一九二七	台湾文化協会が分裂、また台湾民衆党が結成される
一九二八	台北帝国大学開校
一九三〇	「嘉南大圳」が完成 十月、台湾山間部の霧社で先住民の蜂起事件（霧社事件）が起きる
一九三四	台湾議会設置請願運動を停止する 日月潭第一発電所の完成
一九三五	新竹・台中地震 日月潭第二発電所の建設開始 十月、「台湾始政四〇周年記念大博覧会」を開催
一九三七	皇民化運動実施
一九三八	五月、国家総動員法が台湾でも施行される
一九四〇	台湾人の日本名使用を進める「改姓名運動」を展開
一九四一	皇民奉公会の発足（皇民化推進）
一九四三	正式に義務教育が実施される
一九四四	九月、徴兵制度が実施。同時に台湾住民にも衆議院の選挙権が認められる 児童の就学率が九二・五パーセントとなる
一九四五	日本が連合軍に戦敗し、第二次世界大戦が終わる
一九四六	十月二五日、台北公会堂（現・台北中山堂）で「中国戦区台湾地区降伏式」が行われる
一九四七	五月三一日、勅令により台湾総督府は廃止され、日本の台湾統治が終わる 二月二八日、「二二八事件」が起きる
一九四八	四月二二日、陳儀行政長官を罷免、長官公署を廃止し、「台湾省政府」を設置
一九四九	五月、蒋介石が第一期総統に就任 国民党政府、中国本土より撤退し、政府を台北に移す。台湾に戒厳令をしく
一九七一	十月一日、中国共産党が「中華人民共和国」の建国を宣言
一九七二	国連で国民党政府が「中国」の代表権を喪失。同時に国連から脱退
一九七三	蒋經国、行政院長に就任。日華平和条約が終了、日本と断交
一九七五	十大建設開始。このころの前後、「奇跡」といわれた経済成長が続く 総統・蒋介石死去。嚴家淦が総統、蒋經国が国民党主席に就任
一九七八	蒋經国が総統に就任
一九七九	一月一日、アメリカと国交断交 四月、アメリカが台湾関係法を制定
一九八六	十二月、美麗島事件。高雄で起きた民主化を目指す人々のデモ隊と警官隊との衝突 九月、台湾初の野党、民主進歩党が結成される

一九八七	七月十五日、戒厳令解除
一九八八	一月、蔣經国が急死、副總統だった李登輝が総統に昇格。初の台湾出身者の総統
一九八九	四月、外省人二世の独立運動家・鄭南容が焼身自殺
一九九一	五月、「動員勘乱時期臨時約款」を廃止、中国との戦争状態終結を宣言
一九九五	江沢民主主席が台湾政策八項目を提案、李登輝総統が対して六項目を提案
一九九六	三月、台湾で初の総統選挙。李登輝が過半数の得票率で当選
一九九八	上海で台湾と中国の窓口交流機関代表が会談
一九九九	マグニチュード七・三の台湾大地震発生、死者二〇〇〇人以上
二〇〇〇	陳水扁（民進党）が総統選挙で当選、中国国民党が初めて野党となる
二〇〇二	台湾がWTOに加盟
二〇〇三	世界最高層（当時）のビル「台北101」（一〇一階）が完成
二〇〇四	二月、二五〇万人が手をつないで台湾に向けて配備した中国のミサイルに抗議
二〇〇七	一月、台湾新幹線開業
二〇〇八	三月、総統選挙で国民党の馬英九が当選、国民党が政権を奪還 五月、蔡英文が民進党主席に就任（民進党初の女性党首）
二〇一〇	台湾と中国とで経済協議「ECFA」を締結。馬英九の中国傾斜に大きく批判の声が上がる 新北市が発足。台北国際花の博覧会を開催。
二〇一二	日本の尖閣諸島国有化で日台関係緊迫。 一月、馬英九が総統に再選される
二〇一四	12年国民基本教育（中国語版）を実施。ひまわり学生運動が起こる。
二〇一六	蔡英文が総統に就任し、民進党が政権を奪還。鴻海精密工業がシャープを買収。
二〇一七	台北ユニバーシアードを開催。
二〇一八	台中フローラ世界博覧会を開催。宜蘭線普悠瑪号脱線事故発生。
二〇一九	台湾省を事実上廃止。台湾民衆党結成。
二〇二〇	台湾で新型コロナウイルスの感染確認。中央流行疫情指揮中心の下で防疫対策に乗り出す。
二〇二二	ペロシ米下院議長が台湾訪問。
二〇二四	賴清徳が総統に就任。WBSC世界野球プレミア12で台湾が初優勝。

バルトン忌 2025 記念講演会報告書

編集 特定非営利活動法人日本水循環文化研究協会
印刷・発行 2025年12月15日

バルトン忌 2025 特別企画記念講演会

アルカディア市ヶ谷（私学会館）／2025年8月5日